トンボ

第十号

追悼　北川太一
そして吉本隆明

文治堂書店

北川太一

光太郎ルーツそして吉本隆明ほか

四六判　一八四頁
定価　一、三〇〇円

明治十年、上野公園で第一回内国勧業博覧会が開催された。木彫一途の思いを秘めていた光雲の心は「外来の波」にふれ、ゆれる。光太郎誕生までを描く高村家の「ルーツ」は光太郎伝試稿の序章となる。併せて十代からの盟友、吉本隆明との対談、論考も収める。

光太郎伝試稿

ヒュウザン会前後

四六判　二三〇頁
定価　一、八〇〇円

明治が大正に変わる一九一二年、光太郎は斎藤与里の熱意を受け岸田劉生、木村荘八等とともにヒュウザン会を興す。北山清太郎の支援・協力により催された展覧会は「公」に対するアンデパンダンであった。著者のライフワーク、試稿シリーズのⅢとなる。

神西清評論集　上下巻

上巻　外国文学　七〇〇〇円
下巻　日本文学　六〇〇〇円

三島由紀夫が師と仰いだ神西清（一九〇三―五七）、露・仏語に堪能で、堀辰雄とともに流麗な筆致をもって新文学の移植に務めた。

和巻耿介

評伝　新居格

B6判　一五〇頁
一、三〇〇円

大正年代からアナーキズムを基調とした文明批判を展開してジャーナリズムに活躍、大宅壮一の先駆となった。戦後は第一回公選の杉並区長となり話題を振りまいた。

野沢一（はじめ）

詩集

木葉（こっぱ）童子詩経

新書判　二七〇頁
九八〇円

山梨県蛾ヶ岳四尾連湖畔の掘立小屋に、戦前六年間山籠りした若き詩人の人間賛歌。光太郎あての手紙十九通を収める。高村光太郎・序。題字・草野心平。

ふるさと文学散歩

二本松と智恵子

文・勝畑耕一　画・のぞゑのぶひさ

三二頁
三〇〇円

曖昧をゆるさず妥協を卑しんだ高村智恵子、その五十二年の生涯を細密な画と文で綴る。

文治堂書店
杉並区井草
2－24－15
E-mail：bunchi@pop06.odn.ne.jp
URL：http://www.bunchi.net/

目　次

巻頭言　北川太一と吉本隆明	勝畑　耕一	2
詩　トッピンパラリのプー　穏やかな朝	曽我　貢誠	4
詩　おりてくる・生長	市川　恵子	10
随想　私の懺悔録(前)　仙酔を巡る人々	吉田　邦郎	14
詩　柱時計・白夜	宮田　直哉	20
詩　人間の条件・トイレ瞑想	マエキクリコ	22
詩　ある冬の夜	熊野　友嗣	26
詩　柘榴の実・呼び声	服部　　剛	28
詩　空・解消	近藤　　頌	30
連翹忌通信（七）北川太一先生を偲んで	小山　弘明	32
追悼　**北川太一**	大島俊克／渡辺えり／佐藤雅彦 野澤俊之／服部／曽我／市川／前木	36
詩　生きる・お弁当	葉山　美玖	54
詩　おとし穴・無彩色の街	妙圓薗　勉	58
訳詩　運命の女神の歌（ゲーテ･ブラームス）	勝畑　耕一	60
詩歌三評　「**吉本隆明**」	芹沢俊介　津森和治　久保隆	62
詩　夢寐・生命の構造・消えた太陽	北川　光彦	78
トンボの輪	市川　勝畑　近藤　曽我　北川	83
読者の輪・短信		87
編集後記	桶屋風太郎	88

題　字　中島敏枝　　編集　具羅夢

巻頭言

北川太一と吉本隆明

勝畑　耕一

昭和十年代、北川太一と吉本隆明は深川（現・都内江東区）にある府立化学工業学校で学んでいた。小学校でトップの成績でなければ入れなかった超一流、国内唯一の工業高校だ。第一次世界大戦の勝利の後、富国強兵の更なる強化には重化学工業の進展が欠かせない、という機運により創設された。教師はみな軍人あがり、校長の宇野三郎はドイツで中等教育の視察をしてきた人物。

明治期には金魚の養殖や乳牛の飼育に使われていた十万坪の土地を国が買い付け、応用化学・電気化学・化学機械の三学科で二百名からなる（現在の中高一貫）五年制の化学専門の学校であった。吉本は昼間の第一本科、北川は夜間の第二本科、戦前には二人の直接の付き合いはなかったようだが、四年生で分隊長（級長の上）に選ばれた吉本を北川は知らぬはずはなかったろう。

二人はそれぞれ校内誌『和楽路』・『白雲』という謄写版の雑誌に参加していた。昆虫少年でもあった北川には読書の関心の中心にいつも光太郎・賢治がいたという。

戦争が終わった。二人の思いは共通していた。「にわか転換の平和も民主主義も、文学者も、みな胸くそが悪いばかりだった」（吉本）「大声で大東亜の経綸を論じた……陛下の忠実な赤子は、にわかにデモクラシーをたたえ始めた」（北川）。そんな戦後民主主義への怒りや失望のなか、二人は東京工業大学に復学し、その後急速に接近していく。この間吉本は戦前戦後の五年間に次兄権平を事故で、私塾の今氏乙治を東京大空襲で、姉政枝を病気で亡くしている。一方、南宇和島で機銃小隊長として終戦を迎えた北川は、すでに昭和二十年秋には私家版詩集『焔』や『暗晶』をまとめ自己の思いを吐露している。昭和二十四年、二人は東工大で単位を得て「特別研究生」として引き続き在籍、その会話の中心にはすでに『暗愚小伝』を公にしている高村光太郎があったという。吉本はその後、就職と組合運動を経て文学者・詩人の戦争責任論にむかい、北川は定時制高校に職を得て、中野に転居してきた光太郎を訪問する。北川と吉本、十代を同じ校舎で学び光太郎を巡り育んだ半世紀を越える交友、そのころ二人はまだ二十代後半だった。

トッピンパラリのプー

——奥羽山脈の麓の村より——

曽我貢誠

昔　昔　ある所に……
いつもこんな所から話が始まった

まだテレビがなかったころ
農家にはどこにも大きな囲炉裏があって
秋に集めた柴がよく燃えていた
その回りで三毛猫がぐっすり眠り
たまに焼き栗がパーンとはじけて
三毛猫の体がピクッと動いた
一番奥の席にばあさんが座り
その周りを取り囲む孫たち

孫たちは　蒙古(もうこ)の話も
千本垂木(せんぼんたるき)の話も　長い褌(ふんどし)の話も
生きぬくためのコツと知恵を
そして人生そのものを
このばあさんから聞いた
怖い話は　布団の中にもぐり
真面目な話は、顔を乗り出し
おかしな話は　腹をかかえて笑った

孫たちが、眠い目をこすり始めると
ばあさんは　いつも通り
待ってましたとばかり
「トッピンパラリのプー」
といって、話をしめくくった
この言葉は不思議な呪文のようで
孫たちは　いつしか
心地よい眠りについていた

人が死んだ日
夕焼けをカラスは飛んで行くというが
祖母よ、あなたの死んだ日
確かに　カラスは夕焼けを飛んでいた
生まれるのは一人　死ぬのも一人
それがあなたの口ぐせだった
北へ向う新幹線は、二百キロを越してはいるが
もうあなたに追いつくことはない

腹ちがいの母に育てられた少女時代
おかずは妹よりなぜか一、二品少なかったが
水汲み　餌やり　野良仕事だけは
二品も三品も多かった
学校は、二年までしか行けなかった
時計の見方は　妹の
「六時半だよ」という声を聞いて
便所へ行くふりをして覚えたという

悲しいことばかりではなかった
顔さえ知らされずに嫁に来たが
夫に巡り会えたのは幸運だった
おまけに天から授かった六人の子供たち

十九の長男が満州へ旅立つ日
その日から毎日　吹雪の中を
裸足で駆け上がった神社の階段
戦争が終ったのもうれしいことだった
夫は　若くして死んだが
子は奇跡的に戦場から帰ってきた
生まれるのは一人　死ぬのも一人
その通りにあなたは死んでいった

冷たくなった死の床で
遅れてきた孫を笑顔で迎えた
八十四年の青春を

走り切った穏やかな笑顔で

祖母よ
最後に　聞きたかった
あなたの口から
「トッピンパラリのプー」
の一言を

一九八五年三月二十一日没、享年八十四歳
（注、千本垂木、長い褌は地元に伝わる民話）

穏やかな朝

納豆を買いにサンダル履きで外に出る
馴染みの女医さん仕事の準備に忙しい
早稲田行きのバスが定刻に通り過ぎる
レジのお姉さん「ありがとう」と笑顔

テレビでは誰もが呟いている
会社に行くな　学校に行くな
親には会うな　田舎に行くな
盛り場行くな　人にも会うな

ベランダの金魚草に水をやる
舗道のカラスがごみ袋を突く
食卓にはなめこ汁と鯵の開き
緊急事態宣言初日穏やかな朝

おりてくる

市川恵子

生まれつきわたしとワタシが棲んでいるせいで
二通りの生き方をしてきた
やわらかな　わたしと
硬質な鈍色の　ワタシと

ミナサマサヨウナラ　アナタニモ　コノヨニモ
或る午後、木炭をコンロで炙った
植物人間になると宣告された（らしい）　数日後には
眼が覚めてしまった
許しを請うにはまだ早すぎるのだという
かつて赤い京急線の窓際で話されたっけ
シヌノナラ　キョウガイイワ　ダッテイマ　トテモシアワセナンダモノ

彼女のカタカナが今なら理解できる

鳩を追う雀はひらがなだ
死を知らせる鴉はカタカナだ
火焔色の雲を知らない園児はとてもひらがなだ
カタカナの子は迎えを待たずに滑り台を駆け上がる
移動するための段ボールを十束抱えながら
それらを横目にしていると　もはや、
ひらがなの温みも
カタカナの微熱も
ない
わたしでもワタシでもない—私がいる
花壇にそよぐチューリップの人工的な赤のように
世界はありがたく　きょうも
原色だ

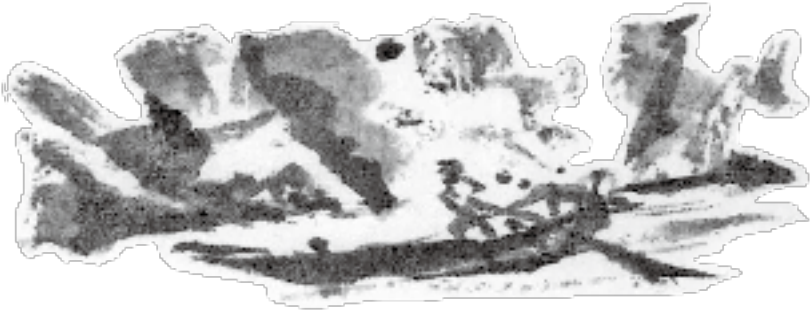
生長

キッチンのシンクのそばにある観葉植物に
水を遣る
或るとき思いつきで買った
三百円ショップのわずか六センチほどの植物は
この一年で三十センチ近くに生長した

日々の水と光と空気だけで
しずかに伸びてゆく
植物は知っているのだ
過分　ということばを
水遣りのとき
身の丈を超えたものは鉢の底の穴から
きちんと排水させてゆく

栄養を与えすぎると根腐れするように
飽食しつづける　わたしには
この清らかな生長が
まぶしすぎる

乱反射する葉の
一枚いちまいから
くねりながら伸びる茎の
一本いっぽんから
無言の声が聞こえてくるようで



私の懺悔録（前）
仙酔を巡る人々

吉田邦郎

1　自己の死を意識し始めた時

前号まで「仙酔余滴」は八回を重ねる事が出来た。こんなに長く続けられるとは思わなかったが、文治堂の勝畑さんに叱咤激励され、何とか続けることができた。その間、平成二九年七月には妻京子に先立たれた。不器用で要領が悪く、会社ではろくに出世もせずに一生を終わってしまった私を、呆れもせず五四年間にわたって支えてくれた良妻は、また、哲郎・純子をきちんと愛情をもって育ててくれた賢母でもあった。

気落ちした私は、『トンボ』7号では、仙酔論の代わりに「わが青春の挫折録」という形でお茶を濁した。弱虫で凡庸な私が気位の高い母親（仙酔の長女）に励まされて高望みをして挫折し、自分の性向に合わない大学や学科を選択し青春期を「うつ」で過ごしてしまった話である。じつはこの件は紙数がたらず尻切れとんぼで終わってしまい、本稿はその続きの意味合いも含んでいる。

さて少年時代の私は昆虫採集が趣味で、捕獲後日ならずして死んでしまう昆虫達の命にも興味を持ったが、極端な臆病者で当時から住んでいた人家の疎らな武蔵野の道路に動物の死骸が転がっていようものなら青くなって嘔吐しそうになる子供だった。そんな私が「自分も死に至る存在である」ことを初めて意識したのは小学校六年生のとき、終戦で疎開先から帰った十二月のことだった。

夜わが家の二階で子供向けの翻訳本を読んでいた。題名も著者名も今では覚えていない。覚えているのは「可愛がっていた犬に死なれた少年が犬の死を悼んで悲しんでいる時、確か神父さんだったと思うが『生物には皆いのちがあり、いのちあるものは必ず死んでいくんだよ。お前もいまにこの犬と同様になる』と諭す」場面だけである。マザコンだった私が最初に思い浮かべたことは母親のことで「お袋も今に死んじゃうのか。お袋、死んじゃあ嫌だ」と悲しくなった。そのうちに、さらに気が付いた……「待てよ、この俺もいまに死ぬのか」と……。

布団の上に仰向けになって天井の節穴を眺めながら、異様な恐怖感にかられながら深夜まで「自分の死」を考え続けた。

その時の私の恐怖感と同様な気持を最も的確に描写しているのはずっとあと、社会人なってから読んだ岸本英夫の『死を見つめる心』の中の一節である。私は脈絡もなく同じような考えにふけっただけであるが、先走って以下にその一節を引用しておこう。

「人間にとって何よりも恐ろしいのは、死によって、今持っている『この自分』の意識が、なくなってしまうということだからである。死の問題をつきつめて考えていって、それが『この、今、意識している自分』が消滅するのだと気がついた時に、人間は、愕然とする。これは恐ろしい。なによりも恐ろしいことである。身の毛がよだつほどおそろしい。死後の生命の存続ということが、この一点にかかっている。何とかして、『この自分』はいつまでもその個体意識をもちつづけうるということを確かめられればとねがう。これが近代的来世観である。」（同書19頁）

僅か一二歳の少年がこのように論理立てて考えたわけでなく、また常時こんな考えに捕われていたわけでもないが、「人間は死んだら身体も心も無くなってしまうのだ」という思いは強く私の心に焼きついてしまい、基本的には今も変わっていない。私はこの時以来、ずっと無神論者になったのである。

2　挫折と鬱 ―わが言動への懺悔録―

「わが青春の挫折録」にも記したが、そんな私が東大の理科受験に二度も失敗、何と国際基督教大学（ＩＣＵ）に入学したのである。理系への進学を諦め、大学の教育方針に反発し、湯浅八郎総長への嫌悪感を抱きその後、一橋大に転学、この大学も性に合わず悶々とした青春時代を過ごしたことなどは既に「挫折録」で触れた。この頃の私の言動により、迷惑を受けた方々は、私が自覚していていない相手をも含めると多数居よう。以下は遅まきながら、そのような方々に対する懺悔録である。

まず謝らなければならないのは亡父・七太郎に対してである。

最初にＩＣＵへの入学を薦めてくれたのは、同志社出身の父親だった。戦後間もない当時、父は家族を養うため小さな会社を立ち上げ苦闘の最中で、私の進路に口を挟むことはなかった。そんな父が珍しくＩＣＵへの受験を勧めてくれたのは、彼が湯浅先生を尊敬していたためと思われ、入学したときは喜んでいる模様だったが、その時にも、また同大を退学して一橋に変わった時にも何も言わなかった。しかし少しがっかりしている様子は息子の私には感じ取れた。

謝らなければならない二人目は成蹊高校の同窓、近藤健君に対してである。

彼は同じバレー部の仲間であり、私以外の同級生でただ一人、ＩＣＵへ入学した人物である。背の高いナイスガイで、花形のエース・スパイカー、一方背も低く運動神経も鈍い私は、当時の九人制バレーで守り専門の後衛だった。彼がＩＣＵへ入ったのは昭和二七年で、開学する一年前である。開学に備えた語学研修所に入ったのである。従って一浪後も東大理科受験に再度失敗し、パチンコ玉のように昭和二八年、同校に転がり込んだ私は図らずも彼と再び同窓となった。

高校のバレー部時代から社会に強い関心を持ち、新聞記者になることを目指していた彼にとって同大学は理想の場所であったのであろう。充実した大学生活を送っていたと想像される。大学に不満だらけで、うつ状態に陥った私は、彼の高円寺にあった自宅までに押し掛けて「ぐだぐだ」と不満をぶつけたこともあったが、いやな顔もせず、いつもていねいに私の繰り言を聞いてくれた。

ＩＣＵ卒業後、彼は毎日新聞に入社しフルブライトの試験に合格、シラキューズ大学院に留学、その後、同社

外信部長やワシントン支局長などの要職を歴任、退職後は母校・国際基督教大学の教授にもなった。

われわれ成蹊高校のバレー部仲間は仲が良く、数十年にわたり年一回の旅行を夫人同伴でおこなっていて、私はそのような機会にも、恥ずかしくて非礼を遂に直接彼に謝ることなく終わってしまった。というのも、平成二九年の八月、私の妻が亡くなってから一ヶ月後に、彼も癌で帰らぬ人となったからである。

謝るべき三人目の方はＩＣＵの湯浅八郎総長である。と言っても、わずか一年でＩＣＵを去った私は湯浅先生と直接話をしたり指導を受けたのではなく、学生や教員が集まって総長が話をする場面に新入生の一員として私も居合わせたというに過ぎない。記憶がかなり薄れているが、当時ＩＣＵではコンボケーション（convocation）と言って米国から著名人を招いて講演をしてもらう制度があり、総長の話を聞くのはそんな時であった。講師として記憶に残っている人にはエリノア・ルーズベルト夫人や原爆乙女達を米国に招いて治療させたサタデイ・レヴューの編集長ノーマン・カズンズ氏などがいた。そんな折りに挨拶に立った湯浅総長は〝This morning we have the privilege of……〟とまず英語で話し始める。区切りのよいところでしゃべった自分の英語を「今朝は□□□先生をお迎えして……」と日本語で繰り返す。今思うと英語のまだ不自由な学生達を思っての配慮であったろうが、まるで英語学校のような大学に、鬱でひねくれ不満だった私は「また始めやがった。気障な野郎だ」と無言の罵声を投げかけていた。

七十歳を過ぎ祖父・仙酔の研究を始めてからも、私は桜や紅葉の季節に妻と一緒に何度か徒歩でキャンパス内の湯浅記念館を訪れていた。同館には同志社総長時代の彼が集めた素晴らしい陶器や漆器類など展示され、湯浅氏が単なるアメリカかぶれでなく日本文化にも深い造詣があることを知った。展示物を見学しながら心の中で当時の私の非礼な思いを詫びていた。驚いたのは米国留学時代に彼が昆虫学を専攻していたことである。

ＩＣＵへの入学を機に理系進学への道を自ら諦めた私には皮肉な話である。苦しかった家計の足しに家庭教師のアルバイトに専念していた私は、当時、大学院に行くことなど思いもしなかったが、同大学で理系コースを選択していたら自分はどんな人生を歩んでいただろうか……などと見学しながら夢想していた。湯浅先生の何代かあとの学長には東大名誉教授で遺伝学の権威の篠遠喜人先生もおられた。私は少年時代から遺伝学にも興味を持っており大学院に行って篠遠先生の下で遺伝学を学べたら……などと夢想したりもした。もう一つ皮肉なこと

は、筆者が一橋大を卒業した頃には父親の会社が成功し、わが家は金銭的に余裕ができ私がさらに学業を続けても何の問題もなかったのである。

3　仙酔を巡る人間関係の不思議

仙酔には明治36年に刊行した『噫有情』という訳本がある。この本の序文は、彼が通った弓町本郷教会の牧師・海老名弾正の夫人みやに、書いてもらっている。みやは高名な儒学者横井小楠の娘であり、その兄は同じく本郷教会の牧師を務めた横井時雄である。また、みやの母・津世子（旧姓矢嶋）の妹には小楠の一番弟子・徳富一敬の妻となった久子がおり、徳富一敬・久子夫妻の息子が徳富猪一郎（蘇峰）、健次郎（盧花）の兄弟で、娘が群馬県安中の湯浅治郎に嫁いだ初子である。

治郎は味噌醤油を商う有田屋の当主で、生涯クリスチャンを通し国会議員にもなり、同志社の新島襄を支えた人物である。そして湯浅治郎・初子夫妻のご子息の一人が国際基督教大学創立時の総長、湯浅八郎先生である。つまり湯浅八郎先生にとって徳富蘇峰、盧花の兄弟は伯父にあたり、海老名みやは大叔母にあたる。いずれもキリスト教熊本バンドに属する人々である。

一方、筆者の祖父仙酔は海老名みやを姉か母のように慕っていた人で、また私にＩＣＵを薦めた父吉田七太郎も同志社大学出身である。今頃になって、私は父が同志社大総長時代の湯浅八郎先生をどこまで知っていたのであろうかと考えている。尊敬していたことは確かであるが……。

追記：『トンボ』10号刊行時今年の二月で八六歳となった私は、連載している『仙酔余滴』を終えるつもりだった。しかし、ごく最近になって初めて知った帰一協会と姉崎正治、成瀬仁蔵、渋沢栄一、岸本英夫らの関係や私の生涯の愛読書『死を見つめる心』にまつわる話等をまとめ切れなかった。そこでもう一回だけ書かせてもらうつもりである。

みちのく秋田に実在した、あの詩（うた）の物語

日本人なら誰もが知ってる童謡 ”赤い靴” は、詩人　野口雨情が北海道で新聞記者をしていた頃に知り得た話をもとに、作詩したものです。

日本が貧しかった時代、愛する我が子をやむを得ず手放さなくてはならなかった。引き取ってくれた相手は遠い異国からの訪問者。

ひょっとしたら、当時の日本には人知れず数多くあったことなのかもしれません。

そんな “赤い靴” の詩のような実話がみちのく秋田にあったことをご存知でしょうか？

明治という時代、獄中生まれという数奇な生い立ちゆえに生みの母と暮らすことが許されず、養母となったアメリカ人宣教師ミス・カラ・ハリソン と共に異国の地アメリカへと渡った、日本名 “金子 ハツ” 、アメリカ名 “コラ・ユリア・ハリソン” 、そして彼女と関わりのあった人々が織りなす、悲しく切なくも心温まる物語です。

脚本・監督　**石谷 洋子**

セミドキュメンタリー映画

みちのく秋田
赤い靴の女の子

2019年5月クランクイン

2020年公開

◆予告編好評公開中◆

壇蜜、永島敏行など出演

「みちのく秋田　赤い靴の女の子・オフィシャルサイト」で検索

協賛金募集中です。ご協力ください。

みちのく秋田・赤い靴の女の子　制作委員会

柱時計

宮田直哉

冬の風は、私たちの胸をしめつけはしなかっただろうか。

暖かな喫茶店で、
私たちのティーカップには、紅茶が少し残っているきりだった。

沈黙の中で鳴る時計の鐘。
お前ははっとして横を向く。私はちらと顔を盗み見る。美しさの半分を知る。

それもつかの間、いささかの余韻も残さずに、静けさが帰ってくる。

冷めた紅茶をすべて飲み干し、外へ出ると
風はいっそう私たちの胸をしめつけた。

白夜

寝台のランプを消した。
開け放たれた窓辺で、レースカーテンがそよ風に揺らされている。
そのすき間から海が見える。薄明が広げられた海が。
穏やかな波が縞模様をつけている。

私はお前の耳元に顔を近づけて、ささやいた。
私たちは顔と顔を見合わせた。
お前は何を聞いただろう。私には何も分からない。
波の音に打ち消された私の言葉を。
風も波も、その重みを運び出してくれはしなかった。
行き場を失ったものを、私たちはただ明るい眠りの中で慈しんだ。

The Human Condition

Kuriko Maeki

Spring to winter, as if time is reversing
A familiar view, now stepping backwards

Prayer to doubt, as if faith is wilting
The God I've trusted, now cold or absent

Gravity rules, as if to knock me down only
Never to lift up, my faithful companion

Questions but no answers, as if to test me
Questing in circles, the same old circuit

Life's unfair, as if to tease me
Crying out, my cells burst with anger

Innate solitude, as if longing for love
Though we all, come alone and go alone

Run away no more, it is time to face it

A cup full of fate, as if poured to be swallowed
Once swallowed, it will never swallow me

Now or never, leap with my own feet

Today is given, as if for me to rise again
Though morrow may be the last day,
I'll plant my apple trees

* inspired by a retired figure skater Tatsuki Machida's "La condition humaine"

人間の条件

マエキ　クリコ

まるで、春から冬へ時が巻き戻されているようだ
余所余所しく後退りしだす、見慣れたはずの景色

まるで、疑うために祈らされているようだ
ずっと信じてきた神は非情、あるいは不在

まるで、叩きのめすために引力があるようだ
倒しても、決して起こしてはくれない道連れ

まるで、答えなき問いに試されているようだ
他になす術も知らず、既存の道をめぐる毎日

まるで、不条理に弄ばれているようだ
溢れる叫びは、細胞が抱えきれぬ怒り

まるで、愛を乞うために孤独があるようだ
誰もが皆、一人で生まれ、一人で逝くのに

もう、逃れることはできない

まるで、飲み干す為に注がれたような運命
全て飲み込めば、飲み込まれることはない

今しかない一瞬を、自らの足で跳べ

まるで、再び立ち上がる為に備えられたような今日だ
たとえ、明日が最後の日でも、林檎の木を植えるべく

＊元フィギュアスケーター町田樹氏の作品「人間の条件」から得た概念を元に書いた詩

toilet meditation

with the hand that wiped the poop,
a rice ball is made and
flowers are arranged.

with the hand that beat the enemy,
a guest's hand is shaken and
a cat is petted.

so it is with words.

with the mouth that gossiped,
new knowledge is taught and
songs are sung.

with the mouth that cursed,
greetings are given and
poems are recited.

like looking at my own hands
at the end of the day,
looking back at my own language speaking
different words from the same mouth
makes me full of shame.

if flowing out of the same heart,
then all the words should be the same
whenever, wherever and to whomever.
if given in love,
whether a rebuke, a speech or a monologue,
it would be nourishing.

a toilet paper is still
white today.

トイレ瞑想

うんちを拭いた手で
おにぎりを握り、
花を生ける。

敵を殴った手で
客と握手し、
猫を撫でる。

言葉だってそう。

悪口を言った口で
新しいことを教え、
歌を歌う。

悪態をついた口で
挨拶をし、
詩を詠む。

一日の終わりに
自分の手を眺めるように
自分の言葉を
振り返ってみれば、
同じ口から
違う言葉を出している
恥ずかしさで
いっぱいになる。

同じ心から出る言葉ならば、
いつどこだれにでも同じ。
愛があれば、
叱咤も演説も独り言も
栄養になる。

トイレットペーパーは
今日も白い。

ある冬の夜

熊野友嗣

北向きの狭い部屋
輻射熱が冷気を運ぶ
また今日もひとり
この容れ物で夜を過ごす

このままここで朽ちるのか
それとも空の広さを知る日が来るのか

私にあるのは
床の底冷えをしのぐサンダルと
数本のちびた鉛筆
そしてウィスキーのひと壜

澄みきった空気が肌を撫で
私の頭は冴えわたる

壁の向こうでは
鵞鳥が一羽跳ね回っている
自分は可哀そうだと喚くように
でも決して鏡を見ることはない

今の私はそこへすら辿りつけない
みずからを閉じ込めているから

柘榴の実

服部　剛

硝子ケースの中にある、木彫(もくちょう)の
酸っぱく熟れた柘榴(ざくろ)から
赤い粒等は顔を出し
薫りは鼻腔に吸いこまれ
ひと時、僕は酔い痴れる

美術館で立ち尽くす
旅人の僕に　体の無い誰か　が
耳もとで
ふいに一言、囁いた

――生は齧(かじ)るほど、味が出る

ふり返った背後には
誰もいなかった

呼び声

横たわる死者の耳は、聴いている
とじた目蓋の中で
静かな表情を天にむけ
何か、ものを云おうとする

耳朶(みみたぶ)から
渦巻いてゆく鼓膜へ
吸いこまれそうに視る、僕は

脳裏の宇宙へ届くよう
密かに声音(こわね)を、響かせる

空

近藤　頌

空は正直だな
だから鏡なのかな

解消

空よりも軽く
わたしをわたしたらしめている

連翹忌通信(七)
北川太一先生を偲んで

小山弘明

とうとうこの日がやって来てしまったか、という感じです。いずれこの日が来ることを覚悟してはおりましたが、いざ、そうなると、なぜこんな日が来るんだ、と、やり場のない怒りと、虚脱感……。

わが高村光太郎連翹忌運営委員会顧問にして、光太郎顕彰の第一人者、北川太一先生が、一月十二日午後十一時二十分、大動脈乖離のため、亡くなられました。

先生は、大正十四年（一九二五）、東京日本橋のお生まれ。おん年九十四歳でした。三月がお誕生日でしたので、今年、九十五歳になられるはずでした。ちなみに「昭和」の年号が、そのまま先生の満年齢になります。昭和元年に満一歳、終戦の同二十年には二十歳、というわけです。今年は換算すれば昭和九十五年です。

昭和十二年（一九三七）に尋常小学校を卒業後、東京府立化学工業学校に入学され、旧制中学の課程を学ばれた北川先生、その後、同十七年（一九四二）には、東京物理学校（現・東京理科大学）に進まれ、その頃から理系でありながら詩歌にも親しまれていたそうです。

同十九年（一九四四）、物理学校を戦時非常措置で繰り上げ卒業。海軍省より海軍技術見習士官に任官され、静岡へ。翌二十年（一九四五）には松山海軍航空隊宇和島分遣隊に転属、海軍少尉となられました。結局、四国の山中で、ご自分よりも若い予科練の少年たちと共に

塹壕を掘りながら敗戦を迎え、復員。

同二十一年（一九四六）、東京工業大学に再入学。一学年上には吉本隆明が居ました。同二十三年（一九四八）から、東京都立向丘高校定時制教諭となられ、以後、同六十年（一九八五）まで教員生活を送られました。ご自身の東京工業大学卒業は同二十四年（一九四九）。最初の頃は大学生と高校教諭の掛け持ちということで、それが可能だった時代だったのですね。

「智恵子抄」は戦時中に既に読まれ、さらに戦後には雑誌『展望』に載った、光太郎が半生を振り返った連作詩「暗愚小伝」（昭和二十二年＝一九四七）を目にされ、「あの戦争はいったい何だったのか」という思いに駆られて、同じく光太郎に注目していた吉本と議論したりなさったそうです。

昭和二十七年（一九五二）、光太郎が岩手花巻郊外太田村から、「十和田湖畔の裸婦群像（通称・乙女の像）」制作のため帰京すると、早速、中野のアトリエを体当たり的にご訪問、光太郎の生き様を通し、「あの戦争はいったい何だったのか」という命題に向き合われました。たびたび訪問するうちにすっかり光太郎に魅せられた北川先生、光太郎の来し方についてインタビューをなさいました。それが昭和三十年（一九五五）の初夏から、光太郎が亡くなった同三十一年（一九五六）の光太郎誕生日、三月十三日まで。概ね月一回のペースで為されたその対話は、「高村光太郎聞き書き」として、筑摩書房『高村光太郎全集』別巻に、二段組み四十ページ超で掲載されています。

光太郎没後は、高校教諭のかたわら、同じく光太郎に私淑していた草野心平らと共に、光太郎の業績を後の世に残すことに腐心され続けました。それが連翹忌となり、ガリ版刷りの『光太郎資料』となり、『高村光太郎全集』となり、『高村光太郎書』（二玄社）となり、『高村光太郎造型』（春秋社）となり、『高村光太郎全詩稿』（二玄社）となり、『新潮日本文学アルバム　高村光太郎』（新潮社）となり……これを挙げだしたらきりがありません。

先生はよくおっしゃっていました。「どんなに優れた芸術家でも、後の世の人々が、その業績の価値を正しく理解し、次の世代へと引き継ぐ努力をしなければ、たちまち歴史の波に呑み込まれ、忘れ去られてしまう」と。まさしく光太郎という偉大な芸術家の業績を、次の世代へと引き継ぐ、その一点を追い続けられたわけです。

また、こんなこともよくおっしゃっていました。「僕は、単なる光太郎ファンだから」。分類すれば、「文芸評論家」「近代文学研究者」などといったカテゴリに入るそのお仕事でしたが、そのように称されることを嫌っておいでした。それは「謙遜」や「韜晦」といったことではなく、

逆に先生の「矜恃」の表れだったように思います。エラい評論家のセンセイたちが、自分のことは棚に上げ、対象を批判することに躍起になっている「論文」（しかも少しの資料だけにしか当たらずに書かれた）などには価値をあまり見出さず、逆にそういう輩と一緒にされてはたまらん、というお気持ちの表れだったように思われます。

そこで、我々次世代の者には「とにかく光太郎本人の書き残したものをよくお読みなさい。そこに答えが書いてある」と、おっしゃっていた先生。「研究」よりも「顕彰」なのだというスタンスでした。「とことん対象に惚れ込むことが大切です」とも。それは、学術的な部分では奨励される態度ではないのでしょう。しかし、先生にとっては、「学術」なんぞ糞食らえ、だったのではないでしょうか。

しかし、「贔屓の引き倒し」のような、妄信的、狂信的なところは一切無く、常に公平公正、たとえ惚れ込んだ光太郎であっても、非なる点は非なり、というお考えでした。そうしたバランス感覚があってこそ、我々は先生を尊敬し続けていたと言えます。

当方、先生とのお付き合いはそう長いわけではありません。ご著書を通じては、学生だった四十年近く前から存じていましたが、直接の関わりを持たせていただいたのは、平成になってからです。光太郎に関し、どうにもわからない疑問が生じ（今にして思えば初歩的なことでしたが）、ご著書の奥付に書かれていた千駄木のご住所に手紙を送って質問させていただきました。すると、ほどなく懇切ご丁寧な返信が。その後、やはり先生が顧問を務められていた高村光太郎研究会にお誘い下さり、その席上で始めてお会いした次第です。それから連翹忌にも参加させていただき、何度も千駄木のお宅にお邪魔したりもしました。

平成十年（一九九八）、先生のご編集になった増補版の『高村光太郎全集』が完結した後、それに洩れていた光太郎作品を見つけ、先生の元にコピーをお送りすると、「すごいものを見つけましたね」と賞めて下さり、それが嬉しくてさらに未知の作品発掘に力を注ぐようになり、光太郎没後五十年の節目となった平成十八年（二〇〇六）には、それらをまとめて『光太郎遺珠』として、先生との共同編集という形で世に出させていただきました。この頃にはインターネットが普及し、情報収集がしやすくなったので、未知の作品発掘もそれほど大仰なことではありません。インターネットはおろか、コピー機さえもなかった時代に、公共図書館などで光太郎作品を発掘し、ご自分の手で筆写し、『全集』にまとめられた先生のご苦労を思えば、頭が下がります。

そして、光太郎忌日の連翹忌。光太郎の歿した翌年の

昭和27年11月28日、27歳の北川太一。日本橋の自宅を生徒だった川原武典が訪れた際の一枚。10月12日には光太郎が7年間の太田村山口での小屋生活を終え帰京していた。北川はそれを知っていたという。
彫刻は高田博厚作「女性マスク」。

第一回から、昨年の第六十三回まで、一度だけ、インフルエンザか何かでお休みされたことがおありだそうですが、それ以外は欠かさずご参加。第五十回までは運営のご中心でした。

その間に、先生と共に連翹忌を立ち上げた佐藤春夫、草野心平、高田博厚、伊藤信吉、高村豊周らが次々鬼籍に入り、今また先生も、光太郎の元へと旅立たれてしまいました……。

そういうわけで、今年初めて、先生のいらっしゃらない連翹忌を運営することとなります。そのご遺志を引き継ぎ、光太郎の、そして先生の業績も、次の世代へと語り継いでいく所存です。しかしながら、微力な当方には、皆様のお力添えがなければそれが果たせません。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

そして、改めまして、先生のご冥福をお祈り申し上げると共に、今までのご労苦に対し、衷心より感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。そして、安らかにお眠り下さい。

高村光太郎連翹忌運営委員会代表

追悼　北川太一

北川太一先生を偲んで

大島俊克

令和二年一月十三日に北川太一先生の訃報に接しました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

高村光太郎先生が昭和二十年五月十五日に東京を発ち花巻を訪れ、昭和二十七年十月十一日に花巻を去るまで、太田村山口での七年間の山居生活を送られたことから、花巻高村光太郎記念会が昭和三十二年二月四日に創立されました。花巻高村光太郎記念会は、高村光太郎先生を岩手に迎えた日を記念して、毎年五月十五日に花巻市太田において高村祭を開催しております。北川先生には、高村祭で二度ご講演いただいておりました。昭和三十七年に開催の第五回高村祭では「高村さんの生涯」の演題でご講演いただきました。人の一生には幾つかの大事な変わり目があり、ロダンの彫刻との出会いを前置きとする明治三十九年から四十二年のアメリカやヨーロッパでの留学体験、それから智恵子さんとの運命的なめぐりあい。数えれば幾つも節目を考えることができるが、大田村山口で過ごした七年間も、生涯での最後の大切な時代だったと思うと話されました。また講演の中で詩「根付けの国」を取り上げ、この詩は日本の近代の詩にほとんど無限といっていい可能性を開いたものとして、特別な意味を持つと述べられました。昭和五十三年に開催された第二十一回高村祭では「岩手の大地に新しい文化を」の演題で、高村光太郎先生が、地方で大地に根を張った文化を築きたいという願いで山居生活を始められたことや、太田村山口での文化的出発の記念となる詩「雪白く積めり」を詩集『典型』の最初に置いた意味などのお話をしていただきました。毎年高村祭では、高村山荘詩碑前において参加者全員で「雪白く積めり」を朗読しております。また佐藤　進　前記念会長の時代になりますが、北川先生には平成元年五月から平成二十六年三月まで花巻高村光太郎記念会の理事として、記念会の運営に関してご指導やご助言をいただきました。

北川先生には多くの編著がありますが、私はなかでも高村光太郎先生の山居生活中の作品である「暗愚小伝」に関しての詩篇注解を興味深く読ませていただいており

ます。高村光太郎先生の詩が作られた時代背景が良く理解できます。

私は平成三十一年四月二日に東京日比谷の松本楼で開催された第六十三回連翹忌に参加した折に、北川先生にお目にかかりご挨拶申し上げました。その時はお元気そうでしたので、今後も高村光太郎先生の作品について色々とお話を伺いたいと思っておりましたのに残念であります。

北川先生、これまで本当にありがとうございました。どうか天上で安らかな日々をお過ごしください。

（花巻高村光太郎記念会会長）

北川太一先生と父と光太郎

渡辺えり

北川先生が亡くなってしまった。

あまりに突然のことで、お通夜に伺った今でもまだ信じられない。同じ年代の私の父が介護施設で車椅子の生活を送り、すべての記憶があいまいになっているのに、毎年連翹忌でお会いしている先生は明晰な頭脳と素晴らしい記憶力で、いつも父のことを気遣って下さっていたというのに。

北川先生のお通夜の写真を持って二月の頭に父に会いに行った。山形の介護施設である。父の耳元で大きな声で北川先生の名前を私が言うと目を見開いた。「お亡くなりになった」というと、大きくうなずいた。

父が連翹忌に参加するようになったのは北川先生たち光太郎のゆかりのある方たちとパリのツアーに出掛けてからだった。光太郎に心酔していた父は、若き光太郎がパリに住んでいた頃に訪れた場所を巡る旅に行くことを心底願っていた。私は当時初めて出演したＣＭのギャラのすべてを父に渡した。父は大いに喜び弟と二人で参加したのだ。パリの旅の間、北川先生の話しを聞いて感動し興奮したのだろうと想像する。翌年から毎年欠かさず連翹忌に参加することになった。私も父に誘われて参加するようになり、父が高齢のために参加できなくなると代りに出席するようになった。そして北川先生の熱い言葉に触れるようになった。

父が高村山荘で毎年五月十日に開催される高村祭の講演を依頼された時に私が付き添いで付いていき、光太郎ゆかりの旅館山翠楼に宿泊した時に父と約束したのが高村光太郎の晩年を描いた戯曲を書くことだった。戦後光太郎は戦争に加担したと言われ、また、自分の妻智恵子

を食い物にしたなどひどい批判を受けていた。私は生卵が凍ると言われるほど寒い花巻で不便な山荘暮らしを何年も続けた光太郎の心情を探りたいと思った。統合失調症を発症した智恵子と一緒に暮らしていた光太郎の苦労や智恵子の思い。内面を探りたかった。世間の表面的な捉え方に違和感を持っていた。父がこれほど敬愛し、大田村の子供たちや宮沢賢治を愛した光太郎の心を探りたかった。山荘を案内して下さる「山の少女」のモデルの高橋愛子さん、雪靴を作ってあげたお礼に光太郎の書を貰ったお百姓さんの息子の戸来和夫さんら様々な方に取材し、資料を送っていただいた。戸来さんは光太郎と宮沢賢治の資料を沢山お持ちで珍しい古本を沢山お借りした。愛子さんには面白いエピソードを沢山お聞きしたばかりではなく、帯で作ったバックや巾着など手作りの作品を沢山いただいた。そのお二人も帰らぬ人となってしまった。その上北川先生までが逝ってしまわれるとは。

私が書いた「月に濡れた手」という題名の戯曲には高橋愛子さんも北川先生も登場する。北川先生は北山という名前の大学生として登場していただいた。文学部ではなく工業が専門の学生だが「僕らが精密な機械の図面書くのと薔薇の詩を書くことはとても似ている」という台詞を喋っていただいた。光太郎が学生だった北川先生の表情に惚れて、「君の首は実に良い、いつか作らせてくれ」と光太郎に台詞を言わせた。北川先生の書かれたご本や、教え子の方たちが書かれた本などを調べ、光太郎が亡くなる日にも登場していただいた。

この私の作品には父と母も登場している。

両親が結婚する前の実話を元にして書いたものだ。

蓄膿症の手術のために入院していた母を無理に誘って光太郎の講演に誘った父の実話である。光太郎は真壁仁さんに頼まれて山形で講演している。真壁仁は山形在住の詩人で、戦時中に智恵子の切り絵を山形の蔵で預かって焼失を避けた方である。

母の話しだと、マイクもなかったので、光太郎の声は全く聴きとれず「愚劣だ。愚劣だ。」と叫んでいた言葉だけが聴こえたという。包帯を巻いた妻を伴い山形から光太郎に会いに山荘に来た若き父を登場させたのだった。

父は死と隣り合わせだった少年時代、光太郎によって生かされたと言っていた。光太郎の詩を朗誦すると死の恐怖は嘘のように消えたと。軍需工場でゼロ戦のエンジンを作っていた少年の文学への入り口が光太郎だった。焼け跡で教育とは何か？　と疑問を持ち、一八〇度変わった価値観の中で、「すべては教育によって決まる。それではその教育の現場でその真意を見極めよう。」そう決意し、故郷山形に帰り働いてお金を作り大学に入った。二十八歳という年齢で、村で初めて大学に入学した

のだった。

「自分はあの時に死んだのだ。後はあまりの人生なのだ」と父は言っていた。武蔵野の中島飛行機工場で九死に一生を得た事件のことを指すのだが、光太郎を心酔するきっかけになった事件なのである。

工場が全滅するほどの爆撃があるとの情報を受けて全員避難の命令が下った日、父の部署だけは誰か管理する人を残せとの指示が出て、誰が犠牲になるのか？　醜い論争が続いた中、父が耐え切れず、自分が残ると言ったという、寮の同質の三人にも残って貰い、無人の工場を見回りながら屋上へ上がり、この太陽を見るのも最後かと思うと口から臓物が出るような恐怖心に駆られた。しかし、高村光太郎の「必死の時」を朗誦すると嘘のように恐怖心が消えてしまったというのである。

その詩は特攻隊で出撃する学生が胸ポケットに縫い付けたと言われている詩で、後に光太郎が山荘での独居生活の中で懺悔し、後悔の念に駆られる作品群の中の一遍である。光太郎は空襲の日に電信柱に隣のオバサンの千切れた太ももがぶら下がっているのを見て、死の恐怖に駆られ、自分のために作った詩であったと告白している。

父は大きな空襲の合った日の翌日は武蔵野市から自転車で本郷の光太郎のアトリエに様子を見に行っている。三月十日の大空襲では無事で、父は光太郎から握手して貰い、サイン入りの「道程」の文庫本を貰っている。渡辺正治様という宛名も書いてある。あの時の大きな暖かな手が忘れられないと最近まで言っていた。それから文通するようになり、光太郎からいただいた葉書と「道程」は山荘近くの光太郎記念館に寄贈させていただいた。

光太郎の言葉を聞き、ぬくもりを感じた人たちが帰らぬ人になっていくのは本当に残念で寂しい。

光太郎の側にいた人たちから伺った話しを若い人たちにも伝えて行きたいと思っている。

戸の隙間から雪が入り込むので白い布を顔にかぶって寝ていた光太郎を亡くなったのだと思って驚いて声をかけた愛子さんの話しなど、愛子さんの声とともに思い出している。

そして、毎年、光太郎の新しい記事が出る度に紹介して読んで下さる北川先生の温かく深みのある声。

いつも若々しく愛らしい奥様が「突然すぎてどうしてよいのか分からない」とお通夜で立ち尽くしておられた姿が印象的で、これから小山さんら若い方々に光太郎と北川先生のことをもっと色々とお聞きし、父の生きる指針となった光太郎の世界を様々な角度から見つめ自分の仕事に重ねて行こうと思っている。

（劇作家・女優）

「道しるべの恩」

～北川太一先生を偲んで～

佐藤雅彦

〈長きにわたるご指導〉

私は、北川家の菩提寺である浄心寺（本郷通りの向丘一丁目バス停前）の住職を勤める浄土宗の僧侶です。北川先生にご指導をいただいたのは、今から四十数年ほど前、都立向丘高校の学生の頃でした。地元、本郷や千駄木の文学散歩にお連れいただいたこともありましたし、青年期の恋愛の相談に乗っていただいたこともあります。また卒業してしばらく先生とはなれた時間でも、私が大学院を終え研究留学に赴いた頃には、ご子息の光彦さんと米国の首都・ワシントンDCで再会するなど、家族と変わらぬようなご厚情をかけていただきました。

〈道しるべとしてのご恩〉

なかでも私にとって北川先生からいただいた大きな影響といえば、人生の岐路に立った時のことでした。高校を終え僧侶の資格を取るべく大正大学を受験して、その専攻を決める折、浄土宗の僧侶になるために、最短で簡潔に学べる「浄土学」課程か、仏教全般を学びながら浄土宗の専門的な知識を習得する「仏教学」課程か、どちらの専攻を取捨すべきか迷っていた私に、先生は即座に次のように答えてくださいました。

「浄土宗の学びは一生、学び続けなければならないことだろうから、先ずはお釈迦様の仏教を学んだ方がいいね」と、あの優しく穏やかな言葉でお諭しいただいたのです。人生の岐路で考えあぐねて迷っていた私に即答して、行くべき道を示してくださいました。人生という道程のいくつかに分かれた分岐点で、迷って立ちすくむ者に道を示してくださる、これほど有り難いことはありません。

今日、もし私が僧侶の世界で、成功しているという評価を得られたならば、それは北川先生の示してくれた道しるべにより、仏道を歩むことができたからといっても過言ではありません。

ご存知のように、日本の仏教は○○宗、◎◎宗といった宗派をひとつの単位としてその実体が営まれています。みなおおもとは「お釈迦様の仏教」だとわかっていても、各々の宗派の運営が先にたち、ともすれば仏教を開いたお釈迦様のことは二の次になり、宗派を開いた「宗祖」が優先されるようなおかしな状況の中で僧侶の養成

教育は行われています。つまり浄土宗の僧侶になるためには法然上人のことが、真言宗なら弘法大師が、お釈迦様より優先して教えられるといった具合です。北川先生は「せっかくお坊さんになるのなら、まずは仏教の開祖・お釈迦様の勉強をしなさい」と教えてくださいました。手っ取り早いお坊さんの資格よりも、真実の道を求めて、お釈迦様の教えを学びなさいと示してくれたわけです。その結果として，私は僧侶の道を歩いていくさまざまな場面で、お釈迦様から筋道を立てて学ぶことのできたことに、喜びを感じてきました。仏教にとってそれは、出発点であり帰着点であったからです。

今こうして「ある」ことの出発点をしっかりと見つめると、自ずと原因の「因」が見えてきます。それをわが心で見つめ、受けとめるところから「因」を「心」の上にいただく「恩」という発想が見えてきます。そうしたことを人生の中で、教えてくださった北川先生のご恩に心から感謝申し上げたいと思っています。

〈法名のこと〉

北川家菩提寺の住職として、ご家族と相談の中で、次のような法名を授与させていただきました。

「寶徳院光譽太壽居士
（ホウトクイン コウヨ タイジュ コジ）」

一句ごとに意訳すると、次のようになります。

寶徳院　「目には見えない宝物（徳）でお守りくださる」
光譽　「仏の光で照らしてくださる」
※「譽」は浄土宗の正当な相伝者に授与す
太壽　「太一さまのいのち（寿命）で守ってくださる」
居士　「素晴らしい、長老の仏さま」

あの高村光太郎さんが智恵子さんのためにお参りされた「松庵寺」の本堂で、しばしば耳にされ、しかも『智恵子抄』にも書き遺された法然上人の「一枚起請文」を北川先生のためにお読みして、この法名をお授けさせていただきました。

奇しくも今年は閏年、二月二十九日が四十九日に正当し、ご家族で納骨法要は営まれました。今は、満開の桜の下で、安らかに私たちの拙い歩みをご覧になっているに違いないと私は受けとめさせていただいています。

お会いしたい思いを感謝の合掌にこめて、お念仏申し上げます。

合掌 十念

（文京区・浄心寺住職）

北川太一先生ご逝去の報に涙して

野澤俊之

未だ寒さ厳しい二月上旬、文治堂書店の曽我さんからお電話で、北川太一先生のご逝去を知ったのでした。お亡くなりになられて一ヶ月ほど経ってからのことです。

思ってもみなかった訃報に接し、あまりにも唐突なことでしたので、まさかとの思いと、驚きのあまり、俄かには信じがたい思いでした。

連翹忌まであと二ヶ月に満たない今、お会いできることを楽しみにしていましただけに、その願いもかなわぬ現実に遭遇し、言いようのない深い悲しみと寂しさ、虚しさに襲われたのでした。

昨年の連翹忌における先生のご挨拶のなかに、健康に留意し、皆さんとお会いできることを楽しみに百歳を目標に頑張りたいと思いますと、元気なお声でおっしゃられたお姿が目に浮かんできます。

いつもながら、お肌の艶も良く、お若くいらっしゃって、とてもお年には見えない温厚で穏やかな先生のお姿が、ありありと脳裡に浮かび消え去ることはありません。

柔和で汚れのない澄んだ少年のようなまなざし、得も言えぬ温もりのあるお心に接するとき、心が和み飾らぬありのままのお姿に心惹かれていました。

お会いする時には、いつもにこやかに微笑まれ、さわやかな仕草でやさしくお話しくださったことがうれしい記憶として残っていますが、今となっては忘れられない懐かしい想い出となってしまいました。

切なく、やるせない思いだけが心にとどまり、命のはかなさと世の無常をまざまざと思い知らされました。

偉大なる先生の繊細にして温かくお気遣い下さったこれまでのご厚情が忘れられず、二度とお会いできないことに思いを馳せますと悲しみはいっそう募り、とめどもなく涙にむせぶのでした。

思い起こしますと先生にはあらゆる意味でたいへんお世話になりました。

昭和の初期、野澤一が人と自然を愛し、こよなく賛美した四尾連湖の湖畔の森の丸太小屋での六年間にわたる生活を通して、思索に明け暮れていた中で残した詩編をまとめた『木葉童子詩経』（私家版）、そして高村光太郎へ送り続けた二百余通に上る手紙を、今を去る四十数年ほど前、北川太一先生がお知りになり、光太郎と野澤一との関わりに注目して下さり、文学的な価値をお汲み取りいただき、文治堂書店からの新たなる『木葉童子詩経』（昭和５１年 刊行）の出版に繋げてくださったので

した。

四尾連湖の自然を敬う謙虚な生き方、小さな命にも心を配り慈しんだ野澤一を広く世に紹介し、その心情を理解していただき、心に響く何かを感じ取ってほしいとの願いが出版の端緒となったものと思われます。

世間に知られることのなかった埋もれた詩編や光太郎宛ての手紙を、北川太一先生、渡辺文治さん（文治堂書店）の上梓への強い思いもあって、大勢の方の目にとまるようにしてくださったのでした。

更に、「四尾連湖・詩碑建立」の話が持ち上がった際には、「詩碑建立委員会（委員長・舟山正泰さん）」の関係者（北川太一先生・高村光太郎事務局長、渡辺文治さん、一瀬稔さん、町長さん、教育委員会、他 多くのみなさん）のお一人として、たいへんご努力を賜りました。碑に刻む詩文の選択、建設的なご意見を頂戴し、さらには熱心に奔走していただき、建立に向けての推進者となってくださいました。

関係されたみなさん、地元のみならず、遠方からもお越しいただき、新聞記者の方々も来られて、雲一つない透き通るような青天に恵まれた初夏、平成元年六月四日、新緑が眩しいほどに美しく映え、心地よい風薫るのどかな四尾連湖の森の頂で詩碑の除幕式が清々しく執り行われました。先生からお心のこもった温かく格調高いご挨拶をいただきました。改めてこれまでの経緯を振りかえって見ますと、とうてい言葉では言い尽くせぬほど如何に熱心に、野澤一のために心血を注いでくださったことか計り知れない多くのものがあります。

慈愛に満ち、献身的ともいえる精神で親身になってご尽力くださったのでした。

多くのご厚情に鑑み身に沁みてありがたく、心より感謝とお礼を申し上げなくてはなりません。

「四尾連湖・詩碑建立」に先立つ平成元年二月、市川大門町教育委員会主催「第三回ふるさと文化人展」の一環として、北川太一先生を講師とする「野澤一文学について」の講演会が町民会館において開催されました。

ご多忙の折、北川先生（奥さまご同伴）、渡辺文治さん、関係者、四尾連のみなさんをはじめ市川大門町の大勢の方々のご出席をいただきました。

北川先生の優しく温かみのある味わい深いお話に、みなさん熱心に耳を傾けられ、楽しく和やかな雰囲気に包まれて、講演会は盛会裡に終了しました。

会場の中には、知り得なかった若かりし頃の四尾連湖における野澤一の考えや行動、村の方との温かい交流について、過ぎ去りし遥か昔を思いだしながら、昨日のことのように懸命にお話をして下さるご年配の方もいらっしゃって、ほんとうにありがたく感激いたしました。そ

の際、先生から〝地元の方の貴重なお話は、どんな些細なことでも書き記し、残しておくように〟と仰せられたことを想い浮かべています。ご高齢の方も多く時を経てやがてはお聞きすることも出来なくなるので、こうした機会にその内容について記録にとどめておくようにとのお言葉でした。緻密までの詳細にわたる膨大な『高村光太郎資料 全六集』の編纂、その後の更なる息の長い資料収集の継続、気の遠くなるような根気のいるご苦労をなさっている先生にして初めて発せられる、大切なお話だといたく感心し、ありがたく思いました。

改めて先生の資料収集への意気込みのすごさを感じたのでした。

『木葉童子詩経』（文治堂書店）の出版、及び「四尾連湖・詩碑建立」につきましてはお忙しい中にあって、北川太一先生をはじめ関係されたみなさんが、ご一緒に甲府や四尾連湖に、打ち合わせのため、わざわざ東京からおいでくださったこともたびたびありました。

今にして思いますと、生活を支えることで精一杯で決して豊かとはいえなかった中にあって、それぞれ言い知れぬ苦しみや悲しみを抱えながら、懸命に生きて生活をしていたころの人の心のぬくもり、情けや親しみ、素直さや人懐っこさといったものが感じられる、なんとも心が通い合い、希望のもてた、いかにものんびりとした良き社会環境にあったのではないかとの見方もできます。

甲府の母が住んでいた家から少し離れた愛宕山のふもとに、中学校の校長先生がお住まいでした。偶々、母が何かの折に道で会われ、北川先生が甲府へおいでになられ、お会いしたことをお話しすると、たいそうびっくりされたそうです。光太郎研究の第一人者として世に知られ、文芸評論家として活躍されていた著名な北川先生をたいへん尊敬されていらした方（後から分かったことですが）だけに、まさか先生がおいでになられるとは思ってもみなかったことなので驚かれたのでしょう。

偶然とはいえ、誉れ高いことであり、不思議な縁を感じたものです。

当時、先生の著作について、母は発行される都度購入させていただいていました。

先生の千駄木のご自宅にも母と一緒にお邪魔させていただいたこともあります。

多くの光太郎関係者・ファンが集われる連翹忌を長年にわたり主催され、母と一緒に何度か出席させていただきました。信念と情熱を傾注され、たいへんご苦労も多かったことだろうと推察いたします。その道を究められたみなさんの尊く貴重なお話、素晴らしい歌や演奏、会場でのいろいろな方との楽しい出会い、歓談は光太郎の知られざる精神面、行動力、人間的魅力、関わりのある

方との交流を知るうえで面白く、自らの成長の励みとなり何よりの喜びとするところであります。ひとえに北川先生の人徳のおかげであり、まことにありがたいことです。

光太郎の持つ人間性、多方面にわたる文学上の優れた言語能力、文体や書、力強さ漲る彫刻の魅力、智恵子への憐みの感情魂を込めた細緻を極めた紙絵等、それらに対する先生の優しいまなざしと深い愛情、澄み切った純粋な精神、心からの思いやり、畏敬の念は常人では推し量ることのできないほど、一筋縄ではいかない強い信念を持たれ貫き通されて初めて光太郎研究に繋げられたのではないかと思います。新進気鋭の若かりし頃より、光太郎に関する著作、膨大な資料の収集・編纂のみならず、幾多のジャンルにわたる著書の出版、文芸誌上での日本を代表する錚々たる面々との座談等、その博学ゆえの精力的な活動、精神力と熱意はまさに超人的といえるものであり、その影響力の大きさをいろいろな機会を通じて存じ上げるにつけ、そのご活躍にたいへん驚かされます。

今日に至るまで衰えることなく、幅広く文芸活動に尽くし貢献されてこられ、精神的にも肉体的にもさぞお疲れになられる、身を削るような辛いお仕事と感じることもあったのではなかろうかと思います。

優しく人間味にあふれ、内面の奥深く秘められた情熱、美しく滑らかな文体の膨大な著作、各地で繰り広げられる幅広く行動の伴う多彩で中身の濃い行事・展覧会等、生涯にわたりなし遂げられたご功績は書き尽くせるものではなく、想像を絶する大きなものがあろうかと思います。

また、定時制高校の教師でいらっしゃった当時、教え子のみなさん、一人ひとりに向き合われ、良き人間関係を築かれています。

先生、生徒のみなさん相互の愛情のこもった文章から、どれほど先生が慕われていたかを伺い知ることができます。

先生を敬う温かい気持ちがみなぎり、なんとも美しく心の和む師弟愛を垣間見る思いがいたします。人と人との温もりを感じさせ、大切にされてきた繋がりは素晴らしく、社会に出てからもその絆は保たれ、立派な人間として責任を果たされ自立し活躍されていることが何よりの証しであると思います。

戦前から戦後を通して、どんなに多くの人に心の灯りをともし続けられたことでしょう。

質素に生きた時代にあっても、心の通い合ったなんともほのぼのとした温かい人間関係が先生を中心として築かれ、学生時代のみならず社会人となった今日に至るまで続いて、単に師弟という関係にとどまらず、社会を生き抜く同志として共感できるものがあり、精神的な影響

力、注がれた愛情、人情味あふれる薫陶は教育者として素晴らしく、その立派な働きや成果はこれからも讃えられていくことでしょう。

あやうくもろい世の中にあっても、それぞれが耐えて精神的に救われたことが多かったのではないでしょうか。

愛情あふれる、誰も真似のできない親しみのこもったお人柄は、いみじくも、戦争体験、戦災を経てご苦労が多かった分だけ人にもたくさんの優しさを与えることが出来たのではないかと思います。

すべてに造詣の深い先生の探求心は、晩年になっても衰えることなく、その表情は生来の魅力を秘め、朗らかで温和な笑顔にあふれ輝いていました。

世の中がいかに変わろうとも、永遠に求められるものは健気にして謙虚な心、素直さや思いやり、鷹揚な精神、許容、慈愛の念といったものでないかと思います。そういったものなくして、人の心を揺さぶることはできないでしょう。宮沢賢治を想い出します。

生涯を通して美しいものへの憧憬素朴な好奇心を少年の頃のままに大切に持ち続けられ、何人にも等しく情に満ちたお気持ちで接しられた、今の世の中では稀有な存在であったのでした。先に立って人としてのあるべき道しるべをお示しくださり、美しく感動を与えてくれる幾多のものを残して逝かれました。人間味あふれた温かいまなざしで見守ってくださった先生について、恐れ多くも、生涯にわたり成し遂げられたすぐれたご功績について、わずかしか知り得ていない身にあって、失礼をも省みず今の感情をあるがままに素直に綴らせていただきました。どうかお許しください。

未来を見据えて活動を続けられることに努めてこられた先生が突然いなくなってしまいました。ほんとうに寂しいきわみです。偉大なる北川先生とのあまりにも急なお別れに喪失感はぬぐえず、すぐに心が癒されることはありませんが、私もまた、生ある限り、先生から受けた変わらぬ思いやりと優しいまなざし、笑顔を心に思い描き、悲しみに耐えて、教えや恩恵を大切に前に向かって生きていきたいと思います。

ほんとうにありがとうございました。

お世話になった在りし日の先生を偲び、謹んで敬意と感謝の気持ちを述べさせていただき、安らかにお休みくださいますよう心よりお祈り申し上げます。

あの日の言葉

―北川太一先生への感謝の手紙―

服部　剛

二〇一三年初冬、私は高村光太郎の彫刻についてのテレビ番組を観て、愛知県で光太郎の彫刻展が催されることを知った。〈この番組を観た偶然のタイミングで行ってみよう〉と直感した私は、碧南市にある美術館を訪れた。ブロンズの手の像や裸婦像、木彫の数々…光太郎の彫刻は皆、沈黙の内に〝何か〟を語りかけており、私は対話するように作品を前にして何篇かの詩を書いた。

鑑賞後、館内でふと目に入った『新帰朝者光太郎―「緑色の太陽」の背景―』という本を買った。それが光太郎研究の第一人者・北川太一先生との出逢いであった。プロフィールに住所が載っており、その晩、宿で便りを書いたが、私の詩集が家にあることを思い出し、帰宅してから詩集と共に送った。

翌週、御本人から著書が送られ、驚いた。添えられた手紙には、大病後で自宅療養中である旨が綴られ、私の詩集についての感想が書かれており、若い私の詩の粗削りな点にはふれず、光太郎の詩魂に通じる点を伝えてくださる温かい手紙であった。同封の『観潮楼の一夜―鴎外と光太郎―』の頁を開くと、北川先生直筆のサインが記されていた。書店では購入できない貴重な講演集と思われ、森鴎外と光太郎は世代を越えて通じ合うものがあることを物語る本であった。読み進めると、終盤で核心的な箇所と出会った。光太郎の随筆集を引用しながら語られるメッセージを、次に要約する。

芸術とは人間を強めるものである。人間をひき上げ、進ませ、日常の苦しみに堪える根本の力を与えるものである。

芸術に目を向けることは、人間に光明の世界が開けることである。芸術は、人間及び、森羅万象の実相を示す。無常なこの世の真（まこと）の〝美〟を人間に悟らせる。

芸術にふれて受ける感動の中で最も説明し難く、決定的なものは、その作品の「品性」である。作品の裏から聴こえてくる品とは、その作家の純真な意力の響きであり、根源から湧き出す泉である…芸術の品は、作家の粛然とした心の声である。燃え上がる火の牽引（けんいん）である。一歩ずつ誠実に道を開いていく作

家の苦難の光である。

二〇一五年六月、私は日本現代詩人会のイベントに朗読で出演した。打ち上げで曽我貢誠氏と出逢い、自作の詩を渡した。数日後、曽我氏から手紙が届き、「これから始める詩誌『トンボ』の同人になってほしい」という熱心な誘いであった。その文芸誌を出す出版社が北川先生と御縁が深く、後に私も詩集を刊行する文治堂書店であるという筋書きに、私は今も運命的なものを感じている。

それから二年後、光太郎の命日に集う『連翹忌』に出席した折、ついに北川先生とお逢いすることができた。すでに九十歳を越えていた北川先生は奥様に支えられ、ゆっくりと椅子に腰かけた。私は「以前に手紙と御本をいただいた服部です」と挨拶し、言葉を交わした五分間が、北川先生と私の二度と無い語らいとなった。私は「今まで多くの詩を読んできて、先生が本当に良いと思う詩とは、どのような詩ですか?」と尋ねた。北川先生はゆっくりと語りかけた。

「読んで心が温まるような…そういう詩がいいと思います」

二〇二〇年一月十三日、北川先生は九十四年の生涯を終え、旅立たれた。弔問に伺い、通夜振舞の後、〈もう一度、北川先生の遺影と目を合わせ祈りたい――〉と思い、寺の本堂へ戻った。御子息の光彦さんに声をかけると、北川先生と私の御縁について「会った回数ではなく、父は服部さんの詩を読み、本質を見抜いていたと思います」と話してくださった。

北川先生とお逢いできたのはたった一度であった。だが、北川先生から頂いたメッセージは、生涯にわたり詩を書いていく私の心の中に、これからもずっと生き続けるだろう。

うしよあゆめいのちもやし

曽我貢誠

一昨年の暮れのことだ。出来上がった「トンボ七号」を携えて、北川家を訪れた。私の家から歩いて五分ぐらいにところにある。玄関のところに北川さんが現れた。そのとき、疑問に思っていたことを聞いてみた。

「宮沢賢治の『雨ニモマケズ』と、高村光太郎の『暗愚小伝』について書き残したことがある、と書いてある

のはどういうことですか？」

昨年三月、『光太郎ルーツ そして吉本隆明ほか』を北川さんが出版した。そのあとがきに気になることが書いてあったからである。

「それでも、まだ書き残した幾つものことが心に残る。その一番の残念は、宮沢賢治の『デクノボー』と『暗愚』のかかわり方だ。（中略）その両者のかかわり方についてもどうしても書いておかなければならない、と思いながら、その時間がまだあるかどうか。」

昨年の夏ごろ、北川さんから五十枚ほどの原稿を受け取った。読んでみるとあとがきに書いていた回答だということが分かった。そこには私が思い描いていた宮沢賢治と高村光太郎とは全く違った視点で書かれていて、目からうろこの文章だった。いつか出版にこぎつけたいと思っている。

お通夜は一月十七日行われた。私はどうしてもこの日に外せない用事があった。そのため、前日の午前中、北川家を訪れることにした。節子夫人と息子の光彦さん、それに光彦さんの奥様がいた。北川さんは顔に白い布を被せたまま静かに眠っていた。家内と供に北川さんへの感謝を込めて手を合わせた。

それから隣の居間で話をすることができた。その日の朝もいつものような日常が続いていた。いつものように食事をし、その後、書庫に入って調べ物をしていた。急に気分が悪くなったようで机にうつ伏せになった。そのまま動かない。たまたま光彦さんもいて驚いて救急車を呼んだ。意識は戻らずその日の深夜亡くなった。夫人はしきりに「ありがとう」も「苦労掛けたね」の一言も聞けなかったことが心残りのようだった。何十年間も連れ添った仲だ。夫人の気持ちを思うといたたまれない気持ちだったが、彼女はしっかりした口調で北川さんとの思い出を語ってくれた。特に結婚する前、北川さんに誘われて高村光太郎のアトリエに何度も連れていかれたことを懐かしく話した。

「そのころはね、私あんまり高村光太郎に興味はなかったの。でも高村さんはいつも私に気を使って優しい言葉をかけてくれたの。今思えば、高村光太郎というとても尊敬できる人に会わせていただいたことに感謝している。」そして話の端々に北川さんへの愛情が滲み出ていた。

告別式は徒歩で行ける浄心寺で厳かに行われた。風は冷たかったが雲一つない青空であった。この寺には立川談志さんも眠っている。住職の佐藤さんは北川さんの向丘高校の教え子である。ここで葬儀ができたのは北川さ

んにとっても本望だったろう。喪主を代表して北川光彦さんが挨拶した。

「父はいつも『うしよあゆめいのちもやし』と言っておりました。」

この一言が心に沁みた。まさに〝いのちもやし〟の人生だったと思う。ご冥福をお祈りします。

月の人

市川恵子

わたしは今でもこの同人詩誌『トンボ』にお誘いを受けたときのことをよく覚えている。

この詩誌の系譜をたどると高村光太郎を研究された北川太一さんの存在があり、光太郎はわたしにとって特別な存在だったからだ。光太郎がというよりは、妻の智恵子が、といったほうがより的確である。昔から、智恵子には特別な親しみがあり、それはわたし自身が精神的な病いとうまく付き合いながら一生を過ごさなければならないことに起因している。光太郎の『智恵子抄』に出合うまでは、世界がとてつもなく暗かった。そのわたしを再生させてくれたのが、光太郎の描く、智恵子の存在だった。

精神を患ったひとりの人間を愛おしく、ありのままに映し出していた詩群はわたしにとってかけがえのない救いになった。光太郎は精神患のひとがどれほど純粋で、穢れから遠い存在であるのかを世に明示してくれた。

その光太郎が現在、これほどまでに多くの人に読まれることができるのは、他でもない北川太一さんの仕事のお陰であったことは間違いない。晩年の光太郎と身近に接し、膨大な資料を編纂し、吉本隆明からも助言を求められる稀有な存在であった。

北川さんも吉本隆明もおなじ科学者として出発し、目指すところは「生」への飽くなき探求であったと思う。それは、北川さんの著書、『光太郎ルーツそして吉本隆明ほか』より

―ごみごみした実験室の片隅で科学者は時々思いがけなく詩を発見するのである。（中略）しかしすべての科学者がかくされた自然の詩に気がつくとは限らない。（中略）ただし一人の人によって見つけられた詩は、いくらでも多くの人にわけることができるのである。

いずれにしても、詩と科学は同じ所から出発した

ばかりではなく、行きつく先も同じなのではなかろうか。そしてそれが遠くはなれているように思われるのは、途中の道筋だけに目をつけるからではなかろうか。（中略）そればかりではない。二つの道は時々思いがけなく交叉することさえあるのである。

という湯川秀樹の言葉を引用したことからも窺える。

また、同著の「隆明さんへの感謝」の章に於いては、

—隆明さんは僕にとってというより、この国の大事な人だから、

と綴っている。

北川さんと吉本隆明は盟友として知られるが、吉本が太陽なら、北川さんは月の人であったとわたしは思う。北川さんは自らの存在を誇示することなく、常に研究の対象にのみ光りを照らしつづけたお人柄であったように受け取れる。北川さんの存在なくしては、吉本隆明も光太郎のことに関してあれほど深い洞察を残しきれなかったと思う。

—光太郎が亡くなってからは、その残された仕事を次の世代に引き渡すことが自分の仕事だと、何時のまにか思い始めていた。

と北川さんが語られるように、昭和二十九年のガリ版での『高村光太郎年譜』から、平成最後の年に至るまで、実に六十五年もの長い歳月を高村光太郎研究一心に注がれた情熱を、わたしたちは忘れてはならない。

科学者であったと同時に詩のこころを常に宿されていた北川さんは、光太郎の詩について、

—感性でうけとるほうがわりあいたやすくて、高村さんの詩はそうではなくて、自分が生きていることにたいする全責任があるような詩です。

と語っている。

詩を書くことを許された者は、この「生きていることに全責任を感じる」ことを、北川さんからの警鐘として受け取るべきだ。

神々しい表情で旅立たれた、北川太一さんのお顔を一生忘れることはないだろう。

私たちへ遺してくださった歴史的なお仕事へ感謝を申し上げるとともに、今後幾度となく、その偉業に接することとなる敬意を改めて深くここへ記しておきたいと思います。

私の北川太一印象記

前木久里子

まるで、マッチ箱の脇に付いているザラザラのような人だ。自分については多くを語らず、敬愛する人については熱く語り、そしてその人達を輝かせる。「ノルウェイの森」のピアノ教師がこう言っているように。「私は、自分自身に対するよりは他人に対する方が物事の良い面を引きだしやすいの。要するに、マッチ箱のわきについているザラザラしたやつみたいな存在なのよ。」そんな北川太一氏の著書「いのち　ふしぎ」と「光太郎ルーツ　そして吉本隆明ほか」は、擦られた幾本ものマッチが赫々と燃える様を見るかのような本だった。箱の中に並ぶ無機質なマッチ棒のように、実像を削がれて記号化し教科書に並んだ名前の数々が、同時代を生きた北川氏の筆によって生き生きした相貌を持つ生活者として蘇る。マッチ売りの少女がマッチを擦る度に手の届きそうな暖かい世界が目の前に現れたように、頁を繰る度に彼等の声が聞こえ、表情が見え、体温が伝わり、個性が味わえ心の匂いが広がるような北川節マジック。高村光太郎、草野心平、吉本隆明、その他多くの文芸人と個人的に深い交流を持っていた北川氏は、鋭い五感で彼等の魂の生態を掴み取り、敬慕に満ちた形容句で彼等の品性を称え、彼等の生きた時代背景とその生き様を俯瞰で見つめ、彼等の行動原理や創作現象を総合的な評価軸で理解しようと試みた。年表、メモ帳、私家版や詩の前書きにも隈なく目を通し、記録の隙間に匿されたいのちを凝視する。そうやって網羅的に集めた星の数ほどの点と点を繋いで線にし、線と線を密に並べて面にし、面と面を組み合わせて立体的な人物像を浮き上がらせ、空白の深淵には洞察を働かせ、自分自身の問題意識と突き合わせながら、生涯をかけて膨らませ続けたのだ。そんな宇宙的に壮大なライフワークを、大好きな人達を追いかけるオタク生活だと言い切る茶目っ気。こんなにも誠実で楽しげなマッチ箱のザラザラを、私は見たことがない。

とはいえ、人は百の面を持つ多面体である。一枚のザラザラが人間像の全体を明らかにするには限りがある。そこで、北川太一氏は才人と才人の火花が散るような化学反応に目を向けた。「草野心平と光太郎」「吉本隆明と光太郎」「湯川秀樹と光太郎」「森鴎外と光太郎」「北原白秋と光太郎」等々、高村光太郎と交流のあった文化人

との関係を描き出すことで、より全体像に近い高村光太郎を露呈させたのである。このような友情の特性についてC・Sルイスは著書「四つの愛」で次のように述べている。「私の友達の一人一人のなかには、私以外の友人しか十分に引き出せないものがある。私ひとりだけでは、一人の友達のなかに存する人間全体を活動させるには十分ではない。私は私以外の光がその人全ての面を照らし出すことを欲する。」北川氏は、組み合わせの妙により人物の知られざる面を浮かび上がらせる達人だった。彼等の心と心の交響を間近で目撃し、或いは書簡や著書から汲み取り、自分の言葉で証しするこの国の生と美の伝道者。

その長きに渡る不可避的な探究の軌道は、今年二〇二〇年の初めに先人達を訪ねるがごとく細く深い境界線の向こう側に延びていった。九十四年間、炎炎と燃えた立派ないのちであった。直接お会いしたことも話したこともない私でさえ、何とも言えない淋しさを覚えている。お会いしておけば良かった。という後悔の念は尽きない。北川氏をご存知だった方々は皆、それぞれの胸の内の北川太一像を想っておられることであろう。C・S・ルイスは前述の著書の中で、こんなラームの言葉を引用している。「三人の友達（A、B、C）のなかで、もしAが死んだ場合は、BはAを失うのみならず、「CにおけるAの部分」をも失う。また、CはAを失うのみならず、「BにおけるAの部分」をも失う。」と。北川氏は高村光太郎の心の瞳に映る草野心平を見い出し、また草野心平の心の瞳に映る高村光太郎を託された数少ない人間の一人であった。そして読者である我々もまた、彼の孫から著名人に至るまで数多くの人物像を北川氏の心の瞳を通して知ることが出来たのだ。北川氏を失うことは、彼にしか掴めなかった人物像の膨大な蓄積を失うのに等しい。だが、嘆くには及ばない。北川世界の火だねは彼の家族や教え子達に直接手渡され、彼の筆を通して本のいのちに託されたのだから。

そう、北川太一氏御自身が輝く番が、遂に来たのだ。全ての著作を恭敬の対象に捧げ、大戦を生き延びた命を生徒達の為に費やしてきた、無私無慾な彼が。今我々はマッチ箱のザラザラと化して、「北川太一を偲ぶ」と冠されたトンボ十号のこの追悼特集においてそのいのちの全体像を輝かせるべく、各々の角度から「わが北川太一」を灯している。そのいのちの火の先には、善い中心が無数に広がる無限未来が待っていることを切に願いたい。

生きる

葉山美玖

夕陽の見える
だらだら坂を下って
新しいパン屋で
食パンを一斤買うこと
花をテーブルに生けること
クーラーのスイッチを切ること
窓を開けて
空気をいれること
友だちの
誕生日を祝うこと
そうめんとトマトと大葉を和えて
冷やした紅茶と
お昼にすること

ドラッグストアーの
シャンプーを抱えて
髪をあらうこと
ノートに日記をつけること
自転車で
ピラティスの教室に通うこと
穏やかな
音楽を聴くこと
夜は
糊のきいたシーツにくるまって
早く寝ること
自分を大事にすること
家族を大切にすること
人を
愛すること

お弁当

明日は大好きな人に初めて
お弁当を作る日なのに
疲れ果てて眠ってしまった
朝三時に目を覚まして
あわてて寝床でタブレットを見て
クックパッドを検索した

冷蔵庫に残っている材料で
できそうなのは
鶏と春キャベツのマスタードのサラダと
ほうれん草の卵焼きだった
冷凍してある胸肉を解凍して
新玉ねぎをスライスして
人参を切っているうちに
流し台はごちゃごちゃになった

六時半にようやっと
トトロの森のランチボックスに
全部詰めた
八時きっかりに駅で待ち合わせをした
あの人は
「ふうん」と言う顔で
黒い鞄にカフェ丼を入れた

十二時半になって
「お誕生日祝いありがとう」とだけ
ＬＩＮＥが一行来た
美味しかったのか
すごく不味かったんだろうか
きょとんとしていたら

「やっと昇進決まった」と
ガッツポーズの
スタンプがわらった

おとし穴

妙圓薗　勉

子供の頃　おとし穴を造った
他人がはまるのを期待した
幼稚ないたずら心だ
はまった他人はいなかった
はまった他人を見ていたら
永久におとし穴を造り続けていた
年を重ねるに連れて
多くのおとし穴に気付く
おとし穴にはまって不幸になった人
おとし穴を造って不幸になった人
子供の頃以来おとし穴を造った記憶はない
はまらないように気を付けているおとし穴
でも気付いている
知らず知らず　造っているおとし穴
はまった他人を見ることもなく

無彩色の街

街を歩く赤い看板　ショーウインドの輝き
緑の街路樹に沿って並ぶ商店
街を歩く前を行く人達　すれ違う人達
黄色の服　青色の服　色彩が流れている
街を歩き続ける　彩色の街を
どれくらい歩いただろうか
ふと気付く　周囲の　景色の変化
彩色の街がすこしづつ薄れている
街を歩き続ける
街は灰色と黒と白のコントラスト
歩行を続ける街の形は崩れている
歩いている　砂漠の中を　これが街の姿か
砂を両手ですくう　灰色の砂が手からこぼれる
砂の中に極彩色の小石を見つける
小石の中に閉じ込められた自分がいた

運命の女神の歌

訳詩　勝畑　耕一

神々に恐れおののけ
類として集う者どもよ！
全てを支配する神々は
永遠に両の手を振りかざし
われらの運命を思うがまま
どのようにもふるまえるのだ。

真に神々を恐れる者どもには
高みに向かうことが叶えられる。
崖を越えた雲の上には
黄金の食卓を取り囲む処に
幾多の席があつらわれている

だがそこで、いがみ合いが始まれば
招かれた双方が突き落とされる

神より蔑まれ、辱められて
深く暗い奈落の底へと
たとえ救いを待ち望んだところで
閉じ込められた闇の中では
正義の裁きは下りはしない。

そんな事には無頓着なまま
神々は宴を催している。
いつまでもあの黄金の食卓で
山から山へ
暗い奈落の底から
落ちた者どもの叫びが
まるで吐息のように立ち昇ってくるのに
息も絶え絶えの巨人の息遣いにも似て
生贄に捧げる匂いにも思え
ふわりと漂う雲のように

もう世を統べる神たちは下方を見ず
これまでのあらゆる種族に対する
肯定の眼差しを捨てはらった
そしてもう、この者たちの孫の世代には
かつて愛した祖先の
静かに語りかける容姿を

映そうとはしないのだ。

運命の女神たちはこう歌っている！
追い落とされた者たちは
暗黒のなかで耳をそばだて
老いたものはこの歌をきき
子や孫に思いを馳せ
頭(こうべ)をただ震わすだけだった。

＊　＊　＊　＊　＊

ゲーテ三〇歳の時の戯曲『タウリスのイフィゲーニア』、登場人物は五人、ゲーテ自身も演じていて以後上演しつつ改作を繰り返している。その第四幕・第五場にでてくるこの詩に『運命の女神の歌』として作曲したのがブラームスだ。

脚本はギリシャ悲劇をもとに書かれている。タウリス国で捕虜となり巫女(みこ)として生きながらえているイフィゲーニア、そこに姉はすでに死んだと思っている弟オレストが上陸してくる……。それにしても冷淡で身勝手に思える女神たちは、戦争に明け暮れる我々に警鐘を鳴らしてくれているというのだろうか？

ファウスト　第Ⅰ部「悲劇」

勝畑孝一 訳・種川とみ子 画・篠崎友調 編集

「『ファウスト』は文学であると同時に哲学である」
1797 年 6 月、シラーはゲーテにそう書きおくった。
年下の盟友の言葉に詩人がどれほど励まされたか。
劇詩として訳されたファウストの真像がここにある。

定価　1650 円（税込）300 頁　1）送料 370 円加盟
ISBN　978-4-938364-274　　振込手数料無料

詩歌三評

光太郎ルーツ そして吉本隆明ほか

北川太一著

吉本隆明に出会った頃のこと

芹沢俊介

1

吉本隆明さんとの出会いは、吉本隆明さんの主宰する雑誌「試行」への投稿者として、であった。最初の投稿は、「北条民雄」。四〇〇字詰原稿用紙七十一枚を書き上げ、封筒に入れ送ったのは、一九六九年初頭だったと思う。日記をつけてないので、記憶にたよるしかないのだが、三月に二十七号が届いた。投稿したことを忘れかけた八月の終わり、二十八号が三冊、送られてきた、そんな流れだったのではないか。

「あれっ?」と思った。なぜ同じものが三冊送られてきたのだろう。いつもは定期購読分の一冊であるのに。いぶかしがりつつ表紙を見ると、「試行」と薄い藍色で記された文字の下の白地に刷られた目次、そこになんと「北条民雄　芹沢俊介」とあるではないか。ほんとうに、びっくりしたのだった。それから、静かにうれしさがこみあげてきた。

三冊のうち、一冊は定期購読の分、私は第十六号（一九六六年二月）からの購読者だった。二冊は執筆者に対して送られたものだったのだ。

この号は総ページ数一〇八、以下に目次を記しておく。

情況への発言　吉本隆明
三好十郎（八）　宍戸恭一
芥川龍之介の位相をめぐって（六）　梶木剛
北条民雄　芹沢俊介
コングロメラ・デ・リュス（二）　内村剛介
アルチュール・ランボオ（Ⅶ）　中村文昭
流漂の果てに（Ⅰ）　浮海啓
印璽　市村温司
炎えろ、死者（四）　矢島輝夫
構造主義者の妄想（下）　三浦つとむ
臨床薬理学試論（二）　鈴木秀男
経済学原理論の方法（Ⅳ）　池上達也
心的現象論　吉本隆明

吉本さんの「心的現象論」はこの号で総論が終わっている。

また吉本さんをふくめ宍戸恭一、梶木剛、内村剛介、矢島輝夫、三浦つとむの諸氏はもうこの世にはいない。二十八号には執筆していないが、当時すでに「試行」の常時執筆者であった国家論、権力論のこの国のとびぬけた第一人者であった滝村隆一氏もいない。

2

さて、投稿した「北条民雄」は二回に分載された。第二十八号（一九六九年八月）、二十九号（七〇年一月）。

二冊の「試行」をじっくり眺めた。両親の膝下に暮らしていた私は、それを二人に提示した。二人は吉本隆明の著作は手に取らなくても、吉本隆明の名は知っていた。だから、「試行」に息子の投稿原稿が掲載されたことを、ことのほか喜んだのだった。そして、二十八、二十九号を各五冊ずつ、欲しいというのだった。

私は、いささかためらったが、「吉本さんだって一冊でも売れた方がいいだろう」、という父の言葉にしたがって、千駄木の吉本宅を訪ねることにしたのだった。電話もせずに、いきなりの訪問だったと思う。というのも、「試行」の発行所に吉本宅の住所は記されていたが、電話は書かれてなかったからである。

千駄木一の二〇の三。二月のある晴れた日、私は世田谷区下馬の実家を出て、東横線、日比谷線、千代田線と乗り継いで、吉本さん宅に向かった。千駄木駅から団子坂をあがり、上がりきったあたりの左手にある八百屋さんの角を左折、すぐの突き当りをまた左折した袋小路の、その突き当りが吉本隆明さんの家だった。

午後早めに出たはずなのに、二月の空は暮れるのが早く、探し当てた時にはあたりは暗くなりかけていたのだった。

チャイムを鳴らすと、「はーい」という返事とともにドアが外側に開き、吉本さんご本人が現れたのだった。名乗った私に、吉本さんは「ああ」、というふうに人懐こい笑顔を向け、私を玄関内に招じ入れた。体から熱気が漂っていて、何か執筆の最中だと感じた。私は慌てた。あいさつもせずに、掲載誌を各五冊欲しいと頼む私に、「そんなには渡せないのです」と言い、ちょっと考える風にしてから「二冊ずつでいいですか」そう言った。私はうなずいた。吉本さんは、「試行」を取ってくると、私に手渡たそうとして、封筒を、と言った。このままで、と言って私は千円札を差し出した。一冊、百五十円、四冊で六百円。吉本さんはズボンのポケットから百円玉を何枚か取出し数えて、おつりといって四百円を私の手のひらにのせた。それから、申し訳なさそうな顔をしてこ

う言われたのだ。「今日はわるいけど、上がってもらえない、こんどゆっくりきてください。それから、一度掲載されたら、あとは無条件だから、よかったらまた何か寄稿してください」。

この最後の言葉がなかったら、と思うと、今でもぞっとする。

私は、この後続けて、「試行」第三十号から三十二号の三回にわたって、全一三五枚ほどの「教育者としての孔丘」という孔子論を投稿することになるのだが、それができたのは、別れ際のこの一言があったからである。「一度掲載されたら、あとは無条件だから、よかったらまた何か寄稿してください」。

この言葉に甘えて、私は二月後、「教育者としての孔丘」第一回分を手に、吉本隆明さん宅に向かった。二階の仕事部屋に通され、原稿を手渡し、お願いしますと言った。このあと何を話したのか記憶がない。話がはずんだわけでもないことは確かだ。しかし、不思議なほど重苦しくなかった。一時間ほどして立ち上がった私に、吉本さんは言った。「これからちょくちょく、きてください」。耳を疑うような言葉だった。

3

一九七三年十二月、「試行」に掲載された「北条民雄」と「教育者としての孔丘」を収録した最初の評論集『宿命と表現』（冬樹社）を出した。芹沢、三十一歳であった。二年前、所帯を持ち、前年長女が生まれていた。吉本隆明さんは、推薦文を書いてくれた。

「『北条民雄』と『教育者としての孔丘』をひっさげて、私たちの前に現れたとき、すでに芹沢俊介は、じぶんの宿運と、政治的なものの本質を洞察する者であった。弱年にして、すでに成熟した文体をもって、一路、必然的な軌道に沿って、生涯のモチーフを獲得しているものの落ち着きと香気を放っている。本書はその、最初の証であるというべきか。願はくば、かれが耐えぬかんことを！」

はたして私は耐えぬいたのであろうか？

4

吉本隆明さんの亡くなった直後に、週刊現代に乗った芹沢の談話を末尾に再掲しておく。

「出会いは、一九七〇年です。吉本さんが主宰する雑誌への投稿がきっかけで、頻繁に家に伺うようになりました。千駄木在住当時のことです。この出会いがなけれ

ば、ぼくは物を書いていなかったと思います。
あれは吉本さん、５０歳頃だったかな。長身でがっしりした体躯、短髪で、伏し目がち、こうした物書きらしからぬ風貌から、近所では長距離トラックの運転手とみられている、そんな話を、腕や頭をかきかき、嬉しそうにされたのです。
その子どもっぽい喜びと仕草が、１８歳年下のぼくなんかに、すごく可愛いんですよ。同時に、知識の仕事にたずさわっていることを深いところで恥じているらしいことも伝わってきました。童子性と含羞が、古今に無類の思想的いとなみと同居していた。生涯を貫く吉本さんらしさでしたね。ところで詩人の魂は不滅、永遠の別れなどあるのでしょうか。」

☆雑誌「試行」は一九六一年、吉本隆明の手によって創刊された「自立」の思想誌であり、一九九七年十二月、第七四号をもって終刊となった。「試行」については、『民間学事典』（三省堂一九九七年）に書いた。

「吉本隆明インタビュー」について

津森和治

わたしは２００３年から２０１０年にわたって計３回ほど、ある出版社の編集者の求めに応じて吉本氏にインタビューする機会を与えられた。時期はいずれも日本にとって転機となる難しい状況の中、吉本さんにとっても晩年の身体不自由なところ正直懸念しながらであったが、本人はいたって気楽に率直に思う所を存分に語ってくれた。

２００３年6月の第一回インタビューは２００１年9月に発生した同時テロ以降アメリカの圧倒的な軍事技術を駆使して行われたアフガニスタン侵攻とさらにそれを経て２００３年3月から開始されたイラクフセイン政権打倒作戦が急展開される中でおこなわれ、別冊ニッチ第一号に「9・11／3．20以降の世界史と日本の選択」と題されて掲載された。
すでに吉本氏は同時テロとブッシュ政権の対応についてもコメントを発表していて、そこではテロという形での「新しい戦争」の始まりを認めながらも、テロを行った側を一方的に批判するのではなく、戦争の関係で「不

可避的」に生ずる被害と、そうではなく意図的に引き起こした無縁の人々への加害とを区別して、後者については根源的な倫理の問題として問われるべきと断じている。

このインタビューではイラク戦争に至った元になる歴史的対立の根拠となるユダヤ教とイスラム教の宗教的対立に遡及して宗教、国家、政治の根本的な問題として解説してもらうことを期待した。吉本氏はユダヤ・キリスト教とイスラム教の宗教的同一性に触れながら、旧約聖書の「ヨブ記」を例に神が先か自然が先かというところではユダヤ教もイスラム教も神が自然より先だという点では同じで、アジアに発生した仏教が自然に神が宿るとしてきたこととの宗教上の違いとして示した。

宗教が形を変えて法さらには国家へと展開してきた過程で宗教の最終の段階として民族国家という形態をとっていき、それが今ヨーロッパのユーロ圏で民族国家の解体に向けた兆候が始まっていると述べた。国家の発生とその本質を「共同幻想」としての宗教を核心として解読する姿勢は一貫していた。

ついで話題は当時アメリカに追随してイラク戦争に加担することになった日本のあり方に移った。

憲法第九条の非戦条項を世界的水準からも評価に値するものとしたうえで、自衛隊が核兵器は別にして、すでに世界的に通用する兵力を備えていることを前提に、その派遣については政府や議会にゆだねるのではなく、「国民の承認」がなければ出動できないような仕組みにすべきだと強調していたのが印象的だった。

そこにはやはりあの大戦での敗戦を体験してきた氏が最終的に判断をゆだねるのは国民自身以外ではないはずだという強い信念があった。

第二回インタビューは２００９年１２月に行われ、別冊ニッチ第二号に「資本主義の新たな段階と政権交代以降の日本の選択」と題されて掲載された。

リーマンショックによって全世界が連動して金融危機に襲われるという様相は世界経済に進行するグローバリズムの実態を見せつけた。インタビューの経緯についてはすでにニッチに載せたものを再掲することとしたい。

インタビューは２００８年におきたアメリカ発の金融危機をとっかかりに、現在の資本主義のあり方を聞くところからはじまった。アメリカの金融危機に際しては日米の経済学者がそれぞれの立場で批判と反省をくりかえし、かつて新自由主義を唱えた自説の間違いに懺悔まで行われているが、吉本氏はすでにバブル崩壊後の不況下で「超資本主義」について分析してきていて、「支配の学」としての「経済学」の無効性を説いている。

吉本氏がまず資本主義の問題として語ったのは、戦前のファシズムと資本主義との関係だった。承知のとおり、政治学者の丸山真男は日本の太平洋戦争にいたる政治過程を同時期におこったヨーロッパのファシズムと同じ観点で捉えており、戦後多くの論評を行った。その業績はドイツやイタリアにおいて発生したファシズムの「典型」を日本の政治状況分析にも適用することで、その差異および類型化をはかったことにある。

しかし、吉本氏はこうした観点と方法にかねて疑問と不信感をいだいていて、日本の場合はナショナリズムの強化されたウルトラナショナリズムであって、先進資本主義国の発展過程であらわれた独裁政治としてのファシズムとはもともと違うものだという見解であった。そしてこのことはすでにマルクスによって後進国がたどる急進的近代化の歴史過程で現れる独裁制として指摘していることだと述べた。

このことに吉本氏がこだわるのは、氏にとって自らの思想の出立点を確認するうえで重要な核心に当たっていたからだと思える。なぜなら、この歴史観は戦前、皇国青年としての生き方を全うしたいと考えていた当時の自分の考えや世界観の根拠にかかわることだったからである。もちろん、その世界観は偏狭でゆがんでいたとしても、必ずしも決定的に間違っていたというものではないのではないかという認識だった。

日本の場合は、歴史的に資本主義の後進国が一般的にたどるウルトラナショナリズムの発現過程だったのであり、ヨーロッパのファシズムとは違うものだったという確信をつかんだことが重要なことであり、その後の吉本氏の政治思想の核となった。ここで、丸山真男の歴史観とははっきりと別れることになったということができる。

そうした観点は、現在の超資本主義国家であるアメリカと後進国家であるイラクやアフガニスタンとの関係でも言えることで、アメリカはイラクなどをただ単に遅れた国家だといっているが、後進国が政治的に独裁制を取るのは、ある意味で必然であり、一般的なことなのだという理解がまったく欠如しているからではないかという歴史認識の批判にもあらわれている。

アメリカ発の金融危機がリーマンショックという形で世界的に大きな影響を与えた状況について、吉本氏はアメリカ金融危機の影響を一部ではなく、すっぽりかぶる形で丸ごと受けるようになった戦後日本の時代区分を「第四期」と呼んでそれまでとは区別した。

このことは、アメリカ一国の問題がそこに止まらず、さまざまな障壁を越えて一気に世界中に波及するに至った現在の新しい経済の形態であるグローバリズムの実態をあらわしている。アメリカ経済の新しい状況について

は『暴走する資本主義』（ロバート・ライシュ著、なお原題は「超資本主義」である）に詳しいが、ここで起きている株主資本主義化や投資の過熱と金融資本の膨張といった事態は日本でも相似形で生じている。今に先立つ日米構造協議や一連の構造改革が何をもたらしたのか、まだ充分解明されているとはいえない。

天皇制国家批判のモチーフはやがて『共同幻想論』として結実することになるが、ここでも吉本氏は西欧の近代国家論には距離をおいて、自らが体験した天皇制国家の解明を『古事記』と『遠野物語』をてがかりに追究して、その起源にせまる考察を進めた。ここで、はじめて国家の起源を宗教、法、国家と展開する共同幻想の中に位置づけ、本質的に規定することになった。

吉本氏に聞きたいことのひとつに「共同幻想」の問題があった。前回では宗教と民族国家の成り立ちについてうかがったが、今回は吉本国家論の基本をなす『共同幻想論』のなかで、かねてひっかかっていた「共同幻想」について特に「個人幻想」との関係について聞くことにした。

『共同幻想論』では共同幻想は個人幻想にたいして〈逆立〉する関係にあるとされている。このことはいったい何を意味するのか。その点があらためて確認したいことだった。

〈逆立する〉ということは本来的にいって両者は「矛盾する」ということではないのか。だからこそ、そこから共同幻想の廃棄といった究極的な課題も導き出されるのではないか。というのが素朴な質問であった。

しかし、この質問はやはり核心からずれていたかもしれない。ここで言われている「共同幻想」も「個人幻想」もあくまで本質論として抽象化された上で取り出された概念であって、その関係が〈逆立する〉関係にあるということ。それが実際の現象としてどうであるかは、あまり大事なことではないということだった。

両者が本質論的に別のものであるということが重要なことであって、実際には同一化することも、矛盾することもいつもありうることで、なんら問題とすべきことにならない。それは次元の違う事柄だということだろう。

共同幻想がしばしば個人幻想に対し抑圧的に働くのはその関係が逆立しているからであり、個人幻想がそれ以上は分割されない個体としての自己にかかわる幻想であるのに対し、共同幻想はあくまでそれ以外の、人間の共同性にかかわる表出としての観念であって、個人にとっては観念としてしか成り立たない幻想であるということを意味している。

あらためて『共同幻想論』の序文で吉本氏自身が述べていることを想起してみたい。

「とうぜんおこりうる誤解をとりのぞくために一言すると、共同幻想という概念がなりたつのは人間の観念がつくりだした世界をただ本質として対象とする場合においてのみである。（以下略）」

共同幻想の本質として、個人幻想と逆立関係にあることについてインタビューの中で聞きたかったことだったが、ここではやはり吉本氏が「自立の思想的拠点」で述べていることに注目したい。

「法・国家というものは、何らかの意味で人間の観念が無限の自己としてうみだした宗教が、個別的なものから共同的なものへ転化され、それによって社会的国家の外へ国家をうみだしたものである。

信仰がもっている憧憬と戒律の二重性は、それゆえ法や国家の本質につきまとっている。国家本質の内部では、国家は宗教を源泉としている。」

ここに人間の観念が、無限の自己としてうみだしたものとしての「宗教」したがって「共同幻想」の本質が語られている。

さらに、「社会的国家は法によって政治的国家と二重化されるとき、はじめて権力をもち、普遍的な〈階級〉のもんだいがあらわれる。それゆえ、国家を宗教から法へ、法から国家へと下降する歴史的な現存として考察しない限り、国家の本質と、そこからうまれる権力の総体をとらえることができないのである。」と述べていて、社会関係の共同性を通して共同幻想へと転化されることで、社会的国家と政治的国家に二重化されて、はじめて政治権力が〈階級〉の問題をはらんで成立する過程が指摘されている。

市民社会での利害対立が政治的共同体では共同利害として普遍化され、法という形で支配権力を合理化するものとなっている。

だから、なぜ個人幻想に対して共同幻想が逆立するのかという問いは、人間はなぜ自己の生の有限性を無限の可能性にまで幻想し、疎外転化する存在であるのか、という宗教の本質、その根源に対する問いでなければならなかった。

わたしはインタビューでこのことにかかずらいすぎたかもしれない。しかし、共同幻想論を解読するためには避けて通ることはできない重要な点だった。随分と懇切に説明いただいたことで、ようやく長年のつかえが取れた気がする。

ついで、話題はこの年9月に起こったばかりの民主党の政権交代に移った。

鳩山首相は近年めずらしく自らの政治哲学を持って登場した政治家である。その核心となる理念のひとつに

「友愛」があげられている。フランス革命で標榜された理念であるが、吉本氏もこれまでに「自由」と「平等」理念の重要性について言及していて、あらためて聞くことにした。

吉本氏は「友愛」をあえて「相互扶助」と言い換えたいとしたうえで、「自由、平等」に並び現在においても有効な、重要な理念だと認めた。たしかにこれまでの近現代史で「自由、平等」にくらべ、「博愛、相互扶助」はそれほど重きを置かれてこなかったきらいがある。それは近代国家の成立と発展過程で不可避的に発生した個人主義、ナショナリズムの高揚にかき消された理念でもあった。グローバリズムといわれる時代にあって、あらためて復活されるべき理念ということだろう。

民主党については今回の選挙によって政権交代がおこなわれたが、そこにはっきりと表明された大衆の意思を評価していた。

なお、民主党の基本政策には三浦つとむの考えにも通じるものがあると指摘した。

「つぎに、学校教育に必要な教科書・学用品その他をすべて無料とし、高級学校を卒業しても多くの賃金を与えないことにする。職場の労働者が働きながら教育を受ける場合も同じである。さらに労働力を健康に維持するために、医療もすべて無料でなければならない。これらは、資本主義的な発想からぬけ切れない観察者からは「社会保障」に見えるが、資本主義国家においては教育も医療も原則として個人負担であり、特殊の場合にのみある程度の公的負担が行われるのに対して、社会主義社会においては原則として無料だという点で本質的に異なっている。」『レーニンから疑え』（三浦つとむ）

三浦つとむの社会主義論については『レーニンから疑え』の中に書かれている高校教育までの教育費と医療費の無償化という考え方のところに示されていて、民主党の政策との類似性を述べたものと思われる。また相互扶助論について言及したが、吉本氏が民営化という時にはそれは住民の自治という意味での民営化を指しており、そのことは相互扶助の理念と不可分のものであった。自由、平等とならんで相互扶助の理念が実現することが社会主義の成就を意味しているということだろう。

最後に現在の思想的状況についての感想を聞くことにした。吉本氏は自らを文学者であり、「思想者」であるとことわりながら、自分なりにこれまで政治や社会のことについてできるだけ考えるようにしてきた。そうしたことからも今の政治家も政治や経済についてもっと専門的に深く考えないとどうしようもないんじゃないかという強い不満をもっていた。

吉本氏にインタビューして思ったことは、いつも物事を徹底して究明しようとするその変わらぬ姿勢だった。何が問題なのか、つねにその核心に問いかけ、独力で思考を深めていく。そしてわたしたちに示される「考え」はその「思考する手触り」とともに差し出されるのである。

ここでは借り物でもなければ、空想でも思いつきでもない、しっかり自分の手で掴まれ、掘り出されたものだけが、まるで農夫が年月かけて育て収穫した産物を手にするように語られる。だからこそ、それはいつも新鮮な野菜のように輝きを放つのだった。

第三回インタビューは２０１０年６月に行われ、別冊ニッチ第三号に「資本主義の新たな経済現象と価値論の射程」と題されて掲載された。

これは第二回インタビューの時には資本主義成立の基盤になっている等価交換価値原理については現在の消費資本主義の段階に入った経済社会では成り立たず、価値論の見直しとして「新しい贈与価値論」の必要性があると提示してきていることについて、現時点での考えを聞くものであったが、相互に行き違いがあったのかほとんど触れられなかった。

そのためこのインタビューでは初めから「贈与価値論」の現在的意味をめぐって進められた。しかし、私たちの質問の趣旨が的確でなかったこともあって残念ながらここでも十分にはかなえられずに終わった。

吉本氏が「贈与価値」についてどのように考えていたか以前この問題について語っていた資料を載せることでそのモチーフの一端を理解するための参考としたい。

※註「吉本隆明が語る戦後55年(４)」三交社 ２００１年刊

「贈与経済を価値論の根底にすえる考え方をすること

もう一つは、労働価値説をとるにせよ、とらないにせよ、その段階はすでに終わってしまっていて、価格と価値は無関係だということからスタートしなければ、現状の市民社会のあり方に対応できる国家の普遍像を見つけることはできない、そういう考え方に到達したわけです。極端にいうとモノの価格は勝手に作れる。部分的な共同性が成立すれば、価格は勝手に作れる。だから、価格と価値を関連づける考え方はやめたほうがいいんじゃないかと考えたわけです。

産業経済学からいいますと、生産と消費だけの違いだけが問題で、産業経済学的に考えると、消費とは生産の一種類であると考えるしかない。消費とは生産の一種類でしかなく、空間的、あるいは場所的、時間的に後れをもった生産を一般的に消費と称しているわけです。

産業経済的な考え方はどうして普遍性があるのかというと、それこそフーコーの考え方と同じで、自然科学的に経済的諸現象を扱えるということが、普遍性を持っている根拠になるからです。その他の考え方ならば、自然科学的な扱い方はできない。今の先進的な経済は、貨幣経済という形でも信用保険とか、そういう形の経済でも全然扱えないし、扱ったら間違いだと思って、徹頭徹尾、産業経済学でやってしまうのがいいと思ったわけです。消費と呼ばれているものは遅れた生産にしか過ぎないと理解し直しちゃって、そう考えれば普遍経済に近づけるといいましょうか、近づける糸口になる。自然科学に近い扱いをして、あまり間違いがないことを言えそうな気がしたので、そこのところまで全部置き直してしまえという考え方になったんですね。

ただし、その考え方には、僕が思うに難点が一つだけあります。ヘーゲルやマルクスもそうですが、段階という考え方がどうやって入ってくるのかということです。等価交換により価値という概念が成立するという考え方は止めようとしたときに出てくるのが、贈与価値という問題です。贈与経済、贈与交換とは、一方が無料で、一方が得るということです。観念現象、あるいは精神現象、精神の集合体と、モノ的現象、あるいはモノの関係、モノの集合は連続的だという概念を作って、段階という概念に引っ掛かったマルクス主義の考え方を払拭しちゃえば、贈与価値をもとにした価値論が成り立つ。そうするとヘーゲル的な段階という概念は修正してもいいんじゃないか。修正しても普遍性は成り立つんじゃないか。そこが、考えていることのおおよそのポイントになっているわけです。

ヘーゲルの段階という考え方はとてもいい考えだと僕は思っています。段階という考え方を入れると、四〇、あるいは百の国家をひとつひとつ調べていかなくても判読できちゃうことがあるんです。ある切り口で段階という概念を決めると、それでできちゃって、少なくとも現存する地球の上の国家は三つか四つの段階を設定すれば、だいたいいえちゃう。それくらい便利な抽象です。政治経済も社会経済もやめようじゃないか、産業経済だけにしようじゃないか、なぜなら、これは自然科学に割合近いからだとなると、段階という考え方も修正しようじゃないかとなります。

ここの地域はこれこれの経済機構があって、こういう国家であるから、こういう段階だといういい方ではなく、産業経済で普遍的にいってしまう。段階の違いとして考えられてきたけれど、段階がなくなれば、等価交換で価値論を作っていくやり方は成り立たなくなって、贈与的な経済、あるいは贈与価値を価値論の根底にすえる考え

方をしないといけなくなる。この考え方をすると、ヘーゲル流の段階という考え方を解体することができます。

そのためにはモノ的現象と精神現象を地続きに扱うことが必要で、それはヘーゲル以前の考え方に似てきます。贈与により村落の権力が大きくなる段階が未開原始社会にあったわけですが、それがある程度違う形で再現するようになります。権力構造に一切関係しないで、贈与経済が等価交換の唯一の基準になる。本来は等価ではない国家と国家の交易でも、等価交換と同じように成り立たせるにためには、贈与価値という価値概念を設定するしかないんです。そのように設定すれば、ヘーゲル流の段階の考え方を無化することができます。

そこらへんのポイントまで考えると、経済的観念も考古学的な層の積み重ねとして考えることができると思うんです。近代経済学とマルクス主義経済学が分かれてしまった根拠に関わる問題だと思うんですが、マルクスは、自分が資本主義について論じていることは、資本主義の担い手である資本主義的人間、つまり資本家はどうであるというような問題ではないという断り書きをして、等価交換の経済学的範疇を緻密に作り上げたと思いますけれど、こんなことは通用しないと僕は漠然とですが思ってきました。

贈与とは一方は与える者で、もう一方はもらう者で、それがなぜ等価交換と等しくなるのか、その理論を作らなければいけないんじゃないかと考えます。それはともかく、マルクス流の考え方も、近代経済学的な考え方も、近代国家、あるいは市民社会なしには成り立たない考え方で、本来的にいって、現在の先進的な世界のある部分は既に、近代資本主義的な国家とは呼びがたい段階に入ったのではないかと思います。しかたがないので仮に消費的な資本主義といってますが、ほんとうは違うことなんだ、物質的な変貌なんだと考えた方がいいと思います。言わないだけで本当はそうなんだと僕らは考えているわけです。」

吉本氏が現在の日本の経済現象で一番の問題点として挙げたのは「労働日の問題と貧富の問題」だった。消費産業の中で長時間労働しないと生活できないという形での貧富の問題が作り出されてきていると指摘した。これまでのように金を持っているかいないかということでは見えてこない問題であるという。

また戦後の経済政策で一番革命的なことは敗戦後にアメリカ軍政局が年間一定以上の収入がある者から資金を提供させたことであり、その資金で小作農が自作農へ転換させたことだという。そしてそのことを敗戦革命と言っていて、このことが敗戦革命の唯一の取り得と評価した。

さらに引き続いて、今何かやるとしたらその政策の続きをすることだとして「一定以上の年間収入を持っている大会社で事業に損をしない範囲でいいから、お金を強制的に出させて、失業者がこれだけいるからそういういう人たちに与えることから始めようという合意を得て実行する」ことだと述べた。

前回のインタビューでも話題となっていたが、吉本氏が理念として考えている「民営化」と郵政民営化という場合に指す「会社化」とは全く異なるものだという。吉本氏はレーニンを引き合いに出して「レーニンが民営化という場合は、民営化すれば公営機関はいらなくなる、公営機関は事務的な処理だけをすればいいのだ」ということだとして、さらにこの考えはフランス革命の理念である自由、平等、相互扶助の中で相互扶助につながるものだと指摘した。

「相互扶助」理念は公的機関の民営化を目指す理念としても重要視されていた。この理念は日本人にとっても相互互恵関係としてなじみやすく、もっと理想的なやり方が考えられるということだった。

私たちはこの回では、相互扶助という理念をめぐって吉本氏の基本的考えを聞くことができ何よりの成果として受け止めた。

インタビューを終えて

「何でも聞いてください。答えますから。できるだけ具体的に聞いてください。」

あらかじめ聞きたいことは文面で渡してあったが、目が見えにくくなってからは読むことも難しくなっていただろう。あらためてその場で質問を求め、そこで考えて思うところを丁寧に述べようとしていた。

「其ま、の影がありけり箒草」

床の間にはいつも虚子の掛け軸がかかっていて、二度目に訪ねた折に「いい句ですね」というと「いやあこれは編集者からの貰いものでして、安いものですよ」と恥ずかしそうにしていた。わたしは小林秀雄が床の間の古い掛け軸が贋作とわかって破棄したというエピソードを思い出していたが、吉本はそんな骨董趣味を全く嫌っていただろう。

それはともかく、私はこの虚子の句が床の間にかかっているのを、以前から知っていて一度聞いてみたいと思っていたのだった。

虚子はこのほかにも箒草によせて句を残しているがこの句はいいものに思われた。それは「其ま、の影がありけり」という表現に尽くされている。箒草に秋の陽光がさし、そのまま後ろにその影を映し出している。箒草とその影とが一対のものとしてあるということを描写する

ことで、それは自然描写をこえて、たとえば人とその思念との喩としてのイメージにまで拡張されていることが、私たちの印象を強めているのである。人と同じ高さ、形に投影されて映し出される影とはその人の思想の姿ではないのか、そのように思わせるところがこの句の優れたところだろう。

しかし、そこまでこの句について聞くことはしなかった。この床の間には季節によっては雛段が飾られていたのを写真で見たことがある。娘さんが二人いるので子供のころに買い求めたものだろう。二人が成人しても季節には雛壇を飾りつづけてきた。ごく普通の家族の風景であるが、こうしたことをおろそかにしないところが「庶民」たる吉本氏の実像なのだった。

玄関を入るとすぐに香の匂いがすることに気づかされる。来客があるときにはきまって香をたいていたのであろう。それは格別の趣味というものではなく猫が数匹いてその匂いを消すためのものだろうと思う。人によってはこうしたペットのにおいに敏感なものもいる。そしてまた、えてして飼い主はそんなことに無頓着なものもいることも現実なのだ。

吉本氏は普段人との面会は午後2時過ぎてからだった。それは著作や読書は主に夜、深夜にかけて行い、明け方から睡眠し起床は昼頃になる。それから食事を済ませて人と会うという生活パターンで過ごしてきたのだろう。長年糖尿病も患っていて、老化ともあいまって足が不自由でもう随分長らく屋内でも立って歩くことができない。訪問して玄関を上がり、応接間で待っていると、しばらくして吉本さんは座ったままの姿勢で両手をついて自分の体を引きずりながら部屋に入ってきて座椅子にたどりついた。その様子が大儀そうに見え心配したが、本人は別段恥ずかしくもてらうこともなく、いつものことです、これが普段通りの姿ですとばかりに平然としていた。そしていったん話し出すと、とことん話を尽くそうとして時間のたつのも忘れるほどだった。それでも満足せず、話は余談にまで及んだ。いつも娘さんの多子さんから制限されている2時間をこえてしまうのだった。

下手をすると時間内にあらかじめ聞きたかったことにまで話題が及ばないことがあったが、できるだけ話を途中で途切れさすことはせずに存分に話してもらうことにした。

帰り際には私たちが遠慮するのもかまわず、家族と一緒に玄関にまで本人も這うようにしながらも見送りに出てくるのが常だった。その来客への心遣いを笑顔で尽す変わらぬ姿勢にはいつも胸を打たれる思いがした。

2020年3月21日

吉本隆明との〈通交〉をめぐって

久保　隆

詩人の清水昶は、かつて「青年期につよい影響を受けたひとに出会うのは、いまでもわたしには怖い気がする。埴谷雄高、吉本隆明、谷川雁、この三人には、わたしは会いたくなかった。（略）『鮎川信夫著作集』完結記念講演会で大それたことに司会などをやったとき吉本さんが講演した。そのときわたしはボーッとあがってしまった。吉本さんとはひとことも口を利かなかった」（『詩人の肖像』八一年刊）と述べていたことがある。わたしは、昶さんより、ひと回り後の世代だから、谷川雁からは、ほとんど影響を受けていないので、埴谷、吉本となる。埴谷さんには十代後半に初めてお会いし、その後、友人とインタビューをした。吉本さんの講演は何度も聞きに行っているし、学生時代、講演録を起こしたこともあるが、直接会って話したいと思ったことは一度もなかった。昶さんのように、「怖い」ということではなく、著作世界に接し続けるだけで充分であり、そのことに共感性を抱き続けることでいいと思っていたからだ。

八三年頃に、吉本さんの長女で漫画家のハルノ宵子（多子）さんと親しくなり（いまでも、交流は続いている）、どうしても、多子さんに伝えなければならない用件があり、電話をして、もし吉本さんが出たらどうしようと思いながら、ダイヤルを回したところ、お母さんの和子さんが出て、ほっとしたことを思い出す。

その後、〇五年に『秋山清著作集』（ぱる出版）の編集にかかわることになり、吉本さんに推薦文をお願いすることになった。万事休すである。電話をかけ、多子さんに取りついでいただき、初めて、声を交わす。終わってみれば、著作世界だけでと固執していたことは、けっして声高に言うべきことではなく、粛々と関係性は開いていくべきだと思うようになった。わたしの妻が、俳句を通して和子さんと手紙のやり取りをしていたこともあり、その年の吉本家の忘年会と、翌年の花見の会から二人で参加することになった。

九六年夏、吉本さんは水難事故に遭った。奇跡的な回復後、精力的に執筆活動を続けた。わたしがお会いしたころは、足腰が大分弱くなったころではあったが、変わらず、いろいろな話ができたのは、貴重な体験をしたといま思っている。

『秋山清著作集』［全十一巻・別巻一］が完結し、「現代詩手帖」で特集を組むことになり、巻頭に吉本さんへのインタビューを掲載することを発案し、吉本さんに快く引

き受けていただいた。〇七年六月五日のことである。自宅に伺い、わたし一人で吉本さんと五時間ほど話したと思う。二人だけで会っていたことに、特に緊張することもなく、中程からは、本題から離れて様々な話題を横断するかたちで談笑したといえる。もちろん、掲載するのは、詩の雑誌なので全部を収録できなかったが、なかでも、わたしにとって深い印象を抱いた吉本さんの発言を紹介したいと思う。

「詩のほうで二十代、三十代の人たちの作品を読むと、なんかこれから後のことを考えたりすることが、お年寄りと同じで、億劫で億劫でしょうがないという感じなんですね。（略）それなら、いい詩を書くために踏ん張ったという作品を出してくれればいいですが、そういうものもないんですね。（略）詩を考えるみたいなところで、難しいことしか言えないなら、それはそれでいいから、詩らしくしてくれと思うんですが、そういうものもない。」（「現代詩手帖」〇七年一〇月号）

これは、詩の世界のことだけではなく、若い世代の混迷様態を切開しているといっていいと思う。

その後、〇八年五、六月に春秋社の仕事で、『第二の敗戦期』という本を進めて、吉本さんに起こした原稿を提示したが留保されてしまった。その頃、なぜか数多くの留保された本があったようで、吉本さん逝去後、次々と刊行された。多子さんは、父が引き受けたものはすべて刊行するという判断をされて、わたし（たち）の『第二の敗戦期』は、一二年一〇月に刊行した。

「気心の知れた友達同士で同人誌を作るみたいな感覚を持ち、三人以上いればしっかりした集団ですので、そこでいろいろなことをやってみる。つまり、ここだけはすこし自由・平等なんだという、三人ぐらいでそういうものを作っていく、ということがたくさんできていけばいいと思っています。」（『第二の敗戦期』）

吉本さんの優しい視線は普遍性を有しているのだ。

久保 隆の「吉本隆明」関連本

『吉本隆明ノート』（ＪＣＡ出版・１９７９）
（原生林・１９８７）

『吉本隆明論集』月村敏行・芹沢俊介・藤井貞和
野崎守英・山本ひろ子との共著
（燈書房発行・ＪＣＡ出版　発売・１９８３）

夢寐

北川光彦

世界とは　この世のすべて
そう　ずーっと　信じていた

しかし、
いくら探しまわっても
世界の輪郭はついに現れず
そこにあるものは　ただ
いのち　だけ

そこで初めて
世界が
生命(いのち)の別称だった　ことに
気がついた

いのちは
地球より重く
宇宙より大きく
世界を丸ごと呑みこむ
巨大なウワバミ

夢の中では
始まりも終わりもなく
時も流れず
過去も未来も現在の中にある

それが夢ではなく
現実だ、と気づいた瞬間

わたしは目醒めた

生命（いのち）の構造

ウロボロス（ouroboros）の
不思議な環から　生まれた
心、愛、美、
そして　いのち

この世は
たがいに矛盾する
二つの知性で構成されている

一つは、
意識や言葉をつかって理解する知性

もう一つは、
無意識の直観でしか気づけない

あるがままの真理(せかい)をつかさどる知性

後者は、
分けても解らない
はじめもおわりもない
自己言及の蛇

消えた太陽

令和二年一月十二日　夜　十一時二十分
かけがえのない太陽の火が消えた

家族を　世の中を　温め
たくさんの　いのち　を育んだ
かけがえのない太陽

沢山の仕事が残された

沈んだ太陽は
明日になれば　また昇るが
今日　消えた太陽の炎は
再び燃え上がることはない

残された仕事と
輝く炎は
次のランナーに
受け継がれた

二度目の東京オリンピックの年、
父、太一死す

トンボの輪

春を迎えて

この早春に親友が逝った。昨年の夏に母が逝去してから半年経ち、すこしだけ気持ちが落ち着いてきた矢先の出来事だった。数日茫然と過ごしていたが、最期のお別れには立ち合うことができた。実家の押入れにあった学生時代のアルバムを引っ張り出し、三十五枚ほどの彼女とのアルバムを作り、ご家族に手渡した。若い頃の彼女がとてもまぶしく収められていた。まだ幼い三人のお子さんを遺し、自身で設計した新築の住まいには一年も住むことができず、とても無念であったと思う。それでも彼女はとても立派な人生を送った。皆から愛される憧れの存在だった。その証拠に通夜には家族葬にもかかわらず、三百人もの弔問があったという。大切なひとが次々と世を去り、わたしはさびしい。死に立ち合うたび共通して感じることは、どの人もきちんとじぶんの役割、現世での仕事を全うして逝ったということ。わたしの仕事はいつ終わるだろう。まだまだゴールは見えない。（市川）

回数字？それは何？

たけやぶやけた、という超有名な回文というのをご存じでしょう。下から読んでも上から読んでも同じ、という一種の言葉遊び。私も回文詩を幾編か試みたことがあり、思い出すままに書くと「ねだるサルだね」「夜、犬いるよ」「夜、熊来るよ」「象からかうぞ」「夜、鮫去るよ」とかを思い出します。ところがこれを数字でも試みた暇な外人がいるのです。回文ではなく回数字ということでしょうか。

０２・０２・２０２０、もしくは２０２０．０２・０２。つまりは今年の二月二日だそうです。たしかにひっくり返しても同じ数字になる。それならこれ以前にはこのような八桁の回数字が西暦上でいつ表れたか、それは１１・１１・１１１１、およそ九百年以上前、ヨーロッパでは十字軍が活躍し日本では鳥羽天皇の治世、これを英語ではＰａｌｉｎｄｒｏｎというらしいです。語源は古代ギリシャ語、しかしこんなことを考えるヒマ人が世界には昔からいたのですね。

先日、超難問の数学のＡＢＣ予想？を京都大学の望月新一教授が証明したという報道がありました。こちらの数字へのこだわりは数学を越えて科学へ、生半可な気持ちではたどり着けないノーベル賞への境地ですね。（耕太郎）

「気遣い」について

［病気の方を気遣いながらお付き合いするのは言葉や態度を気にしてこちらも息が抜けず私には無理なようです」とは、ある人から受け取ったメールである。どういう話の流れからそうなったのか振り返ってもわかりかねているのだが、これは私が人付き合いに対して障壁を持っているため心療内科に通っているという旨の内容をお伝えしたところ返ってきた文面の一部である。

ここに記しているのは本当に一部ゆえこれだけ読むともう会いたくないとも、私に対する心配りとも、いかようにもとれてしまうのだけれど、その辺りのことを私は誹謗中傷したいわけではないことをあらかじめここで明言しておきたい。

私がここで注目したいのは、どうして心療内科に通っていると「言葉や態度」を「気遣い」ながら接しなければならないと思うに至ったのかという点である。

この部分はこと、精神に障壁がある人ばかりでなく、身体に障がいのある方、セクシャルマイノリティをオープンにしている方と接する上でも生じがちな、いわゆる本人からすれば「気遣われたいわけじゃない」問題の重要な論点になるのではないかと思ったのだ。

「気遣わなければならない」と気負う人たちはどうしてそう思うのだろうか。私が心当たりに思うことは、それは「不要に傷つけたくない」という気持ちの裏返しという側面である。もう私と出会う以前に傷ついてきた人たちのことを、私の安易な言動で傷つけたくない。そんな想いがあるから、私が傷つけてしまいそうな人は自分から身を引いて関わらないように〝配慮〟する。しかしこの〝配慮〟が〈された側〉からすると自分の遠ざけられた理由がよくわからない謎と映ってしまう。結果その理不尽さが元々の想いに反して相手を傷つけている、というコントのような顛末が現実に起こっているのではないだろうかと今回推測した。

無意識の行動が受けた側からは差別や偏見と受け取られることはよくあるという。私だってこの文章を書いたことによって多くの人を傷つけているのかもしれない。しかしながらいつまでもその「無意識」とやらの責任にし続けていて、なんの進展があると言えるのだろうか。

この「無意識」が一体どこから来ているのか。それは個人だけの問題ではなく、世の中のその複雑さを複雑なままに見つめていって初めて輪郭のあるものになると考えている。

何かを「気遣わなければならない」という緊張した態度が解け「尊重」という一旦相手を受け入れる方向の人付き合いができるように社会を変える手立てを考えたい。（近藤）

持続可能な社会へ

リスクというものを考える。まさか今年新型ウイルスが世界中に伝染するとは驚きだった。しかし、これは想定外ではなく歴史的にも定期的に繰り返されてきたものだ。東日本大震災では原子力発電の大変なリスクも分かった。そして東京や大阪等の大都市に、大変なリスクがあることが指摘されている。

第二次世界大戦が終わったとき、日本人だけでなく世界中の人々の価値観が大幅に変わった。おそらく。この新型コロナウイルスが終息した後の世界は、私たちが予想もしない全く新しい世界が形作られるだろう。

たとえばテレワーク化がいっそう進むだろう。大手企業だけでなく、教育関係、中小企業にもどんどん広がるはずだ。そしてＡＩやドローン、ロボットなどのＩＴ企業がどんどん成長するだろう。しかしリスクという観点で考えれば、そこにも常に危険も含むということだ。インターネットは確かに様々な技術で世界中を結びつけた。しかし、同じ理屈で遮断することも可能だからである。これからまた世界中が大パニックに陥ることがあるかもしれない。この世に絶対というものはない。

今後政治、経済などの大転換が起こるだろう。民主主義や資本主義も問われている。また宗教や文化活動にも大きな影響があるかもしれない。

その一方で、時代がどんなに変わろうと人は恋をし、ご飯を食べ、酒を飲み、人と語らい、笑ったり泣いたりしながら一生を終えることには変わりない。

これからのキーワイドは持続可能な世界の構築である。そこで生活についていえば地方は安全で住みやすいのではないかという動きがある。テレワークは都会と地方の距離を縮めた。都会の会社に行く必要はない。自分の子供時代を振り返る。お米農家だった。ほとんど自給自足の生活だった。野菜は、キャベツ、なす、キュウリ、トマト、イチゴ、かぼちゃなどをなんでも作っていた。秋の終わりには、大豆を大量にこねて味噌を大樽に作り、豆腐も納豆も作っていた。大量に採れたジャガイモは、鍋で煮て牛や豚に餌として与えた。大根は軒先につるし漬物などの保存食にした。飼っていた鶏の卵は新鮮だった。役目を終えた鶏はチキンカレーの具材に。ただ魚や塩、日用品などは一週間に一度訪れる行商の人から買っていた。今考えると、物はなかったが結構贅沢な生活をしていたように思う。

今、日本の食料自給率は三十七％と言われている。今後自給率を高める政策や、地産地消、スローライフも案外定着していくかもしれない。これからはのんびりした地方の時代が始まる予感がする。

（曽我）

令和二年一月十二日

父北川太一が亡くなりました。享年九十四才。二回目の東京オリンピックの年、家族みんな無事にお正月を迎えることが出来ほっと一息していた矢先の出来事でした。その日の父はいつもの様に朝ベッドから起き、母とともにパンと牛乳の朝食をとり、そのまま食卓に突っ伏して、その夜にはもう帰らぬ人に。大動脈解離、あまりにも突然の出来事でした。まだ実感がありません。

父は生前、定時制高校の教諭をしながら高村光太郎を研究していました。出勤は夕方、夜の遅い帰宅を二階の寝室で待つ母と妹と私の三人。二階の寝室への階段を上った突き当りにはいつも光太郎の大きな写真がかけてあり、光太郎はあたかも家族の一員のようでした。百歳まで仕事をすると言って資料を集めていた父。どのくらいの仕事が、未整理の資料が残されたのか、それらの全容を把握するだけでもさらに時間がかかりそうです。光太郎研究もまだやり残したことがある。そのことを父は、「高村光太郎研究（40）」（野末明編集、平成三十一年四月）の「再びもう一度考えてみたいこと」の中で、旧友の吉本隆明氏の言葉をあげながら次のように書いています。

「……本音をいえば、晩年の高村光太郎の詩も彫刻も理解しにくい部分がのこる。西欧近代の芸術を腹中に容れた東洋の意味が、負数であるのか正数であるのかは、まだ本格的に問われるほど、この詩人・彫刻家は読み切られていない。ヨーロッパの精神をおなかの底にたたき込んで、そして東洋についても考えるだけ考えた高村光太郎のものの考え方、そこから人間についての真実を捕まえようとしている高村光太郎の思想について、自分は長い間ずいぶん読んできたけれど、実は充分わからないところがある。」

その疑問に対する答えの一つではありませんが、私は、好き勝手なことを書いていると父に怒られるのは覚悟のうえで、「高村光太郎研究（41）」（令和二年四月）に、「高村光太郎の哲学・思想・科学／高村光太郎が彫刻や詩の中に見つけた「生命（いのち）」とは／―画竜点睛、造型に命が宿るとき―」という題で、東洋（レンマ知性としての光太郎の「触覚」）と西洋（ロゴス知性）の融合した光太郎の知性について書きました。最後になりましたが、生前、父と親しくお付き合いいただいた方々に、感謝の気持ちを込めてありがとうございましたと、あらためてお礼を申し上げます。もとより父と同じ仕事は出来ませんが、父のいのちと意志は、残された家族と力を合わせて、引き継いでゆく所存です。これからもよろしくお願いいたします。

（北川光彦）

読者の輪（9号より）

★神西清特集、興味深く読ませていただきました。堀辰雄の親友であり川端康成、小林秀雄、室生犀星らとの交流など、戦後の文壇に大きな痕跡を残した人だとわかりました。もっと光を当ててよい文学者だと思います。他の人にも紹介したい。（N）

★神西清は三島由紀夫や遠藤周作が師と仰いだすごい人だとわかりました。また角川書店を立ち上げた角川源義とも親友だと知り驚きました。若いころ読んだ「桜の園」改めて読んでみたいと思います。（O）

★曽我さんの「田植えの頃」私も東北出身なので、本当にそうだと思いました。あの時代が懐かしい。（T）

★吉田さんの「仙酔余滴」漱石の『猫』のヒントがホフマンの小説からとされています。しかし、トマス・グレイの詩から取ったのではないかというのが面白かった。（T）

★佐相さんの「木葉童子」の紹介は、改めて野沢一に光が当たってよかったと思う。（U）

★市川さんの「赤い月」「月がさきに泣いていた」が心に沁みました。お母さんが亡くなった悲しみが伝わってきました。（M）

★北川さんの詩は、宗教や科学や文化を越えた壮大な視点で書かれている。これからが楽しみである。（A）

★マエキさんの「新芽なる子ども達よ。」この子ども達に希望を託し、世界を浄化してほしいものです。（S）

★熊野さん、五島列島を紹介してくれてありがとう。私は長崎出身なので、また行きたくなりました。（N）

★小山さんの「連翹忌通信」はいつか、本にまとめて欲しい。（T）

★宮田さんの詩は、村上春樹の「ノルウェーの森」を連想しました。幻想的な所がよい。近藤さんはいつも挑戦的な試みがあります。人の悩みや悲しみを、消化と有理化と数学的思考で表現したのが面白い。（S）

★服部さんの作品は、光と影に彩られている。その透明感がよい。（O）

★勝畑さんの、神西清・年譜的素描は力作です。大変な労力がかかったと推察されます。「ドイツ事情」楽しく読ませていただきました。（H）

短信

▼北川太一さんが今年一月十二日逝去されました。享年九十四歳。高村光太郎研究の第一人者であり、その人柄は誰にも愛されていました。ここに哀悼の意を表します。

▼高村光太郎の命日、四月二日の第六十四回連翹忌（日比谷松本楼）が、コロナウイルスのため中止となりしました。なお来年度は行う予定です。

▼八月九日に予定した第二十九回女川「光太郎祭」もコロナのため中止です。次年度は津波で流された石碑がようやく再建される予定です。

▼壇蜜さん、永島敏行さんなどが出演する「みちのく秋田　赤い靴の女子」の映画製作が着々と進んでおります。協賛金を募集しています。協力していただいた方には、チケットの他に返礼品をご用意しています。詳しくはホームページを。今秋公開予定です。

▼神西清全集・全詩集特価２０００円（送料込）箱入り・四六七頁、残部僅少。

▼今号より定価五百円です。（編集部）

編集後記

秋田県横手市は「山と川のある町」である。今年のかまくら祭は雨にたたられた。それでも翌日から深夜まで、この地で映画の撮影が行われた。「みちのく秋田赤い靴の女の子」である。昔の民家を借り切り母親ハツに扮する壇蜜さんが、罪を犯してしまう重要な場面である。

ずっと都会に住んでいた私にとって初めはただ寂しい町にしか見えなかった。しかし、何度か通っているうちに風景と人情に触れ、いい町だと思うようになった。そしてそこから見える山々に目を見張った。そうかこれが青い山脈か、と。

日本の戦後は、「青い山脈」の歌で始まったと言われている。この小説の作者石坂洋次郎は、戦前十三年間この地で高校の教師をしていた。教え子にジャーナリスト、むのたけじがいる。

西條八十作詞「古い上着よさようなら…。」の歌は戦後ラジオから流れてきて多くの人々を勇気づけた。

退職後石坂は横手を離れ東京で作家活動に入る。「若い人」「陽の当たる坂道」「山と川のある町」などの傑作を世に送った。横手から見える四季折々の山々はまさに青い山脈である。遠くに雪を頂いた鳥海山は不思議な威容を誇っていて、ああこれが石坂の見た青い山脈かと思った。

今、世界中が新型コロナウイルスの恐怖におののいている。しかし、必ずやこの暗いトンネルの先に希望の光が待っているはずである。そのとき口ずさむ初めの歌はどんな曲だろう。今から楽しみである。もちろん、映画の公開も。（桶屋風太郎）

トンボ　第10号
発　　行　2020年6月15日
編 集 者　曽我貢誠
装　　画　成川雄一
発 行 者　勝畑耕一
発 行 所　文治堂書店
〒167-0021 杉並区井草2-24-15
E-mail: bunchi@pop06.odn.ne.jp
郵便振替　00180-6-116656
印刷製本　有限会社　ワードウェブ
〒142-0062　品川区小山4-5-5

安川定男
詩と音楽
四六判　二三〇頁
二、六〇〇円

白秋、朔太郎の韻律を分析、ドビュッシー、ラヴェルを通じて詩と音楽との係わりを追究する。齋藤磯雄、高田博厚、山崎栄治らの良き師友に囲まれ、名ピアニストの妻との語らいの中で、著書は豊かな音楽的思考を培った。

秋山賢司
碁の句――春夏秋冬――
B6判　二〇〇頁
一、二〇〇円

碁の背後にはさまざまな文化的文芸的な厚みがあります。俳句がそのいい例でしょう。ほかにこんな素晴らしい知的ゲームは考えられません。本書を多くの方にお勧めするゆえんです。
（大竹英雄名誉碁聖）

吉田邦郎
忘れられた宗教哲学者 斎木仙酔
四六判　四二〇頁
三、五〇〇円

古今の宗教・哲学・詩歌・文学を包括し、独自の世界観を目指した斎木仙酔（一八八〇―一九三二）の評伝。仙酔の孫である著者、六〇〇枚の労作。年譜・書誌・四百人超の人名索引付。

阿武千代
陸軍看護婦
四六判　二一〇頁
一、三〇〇円

戦争末期の広東、厳しい軍隊の規定にあって、著者は赤痢、チフス、コレラ患者の伝染病棟で看護婦として従事した。波第八六〇一部隊とよばれた陸軍病院での実体験を綴る。佐藤愛子氏推選

曽我貢誠　詩集
学校は飯を喰うところ
一、二〇〇頁
五〇〇円

「いじめを一人でもなくすこと」「先生を五分でも早く家庭に帰すこと」そんな思いで、元中学教師が心を込めて綴った学校詩集！　昔、中学生だったあなたも読んでみて下さい。（著者）

秋山清
短歌入門　誰にもできる作歌と鑑賞
一、五〇〇円（税込）　二五〇頁

「わたしたちは自分の現代詩を書くためにも、短歌の古さと伝統的な力を知らねばならない」
詩人　秋山清（一九〇四―一九八八）半世紀ぶりの再刊
装幀　坂井てい

弊社の書籍は一般の書店には並びません。送料無料ですので直接の購入が便利です。定価はすべて税抜価格です。

9784938364410

ISBN978-4-938364-41-0
C9092¥0500E

1929092115009

定価　500 円（税別）
文治堂書店